

祖龍と紅龍の力を持つ  
青年がダンジョンで一  
族復興を願うのは間  
違っているのだろうか

三本線

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

昔この世界には龍人族と呼ばれた種族がいた。

この話はそんな龍人族の数少ない生き残りの主人公の話。

# 目次

あらすじ？	1
龍人の少年うまれる	5
別れと出会い。	9
自己紹介と怪物狩と修行	15
怪物狩の過去と旅立ち。	20
龍人オラリオに立つ	26
入団試験	37
入団試験②	46
セクハラと歓迎会	57
恩恵とステータス	61
初めてのダンジョン①	69
初めてのダンジョン②	75

初めてのダンジョン③	80
初めてのダンジョン 終	88
闇派閥と正義のファミア	93
闇派閥と正義のファミア②	107



## あらすじ？

昔。この世には龍人族と呼ばれる種族がいた。

この種族は人数こそ少ないもの魔法を扱うものが多く、他の種族からは恐れられていた。

それゆえ彼らは一つの場所にとどまることなく様々な場所を移り住んだり、秘境のよ  
うな場所で戦いを避けて生活をしていた。そう、神々がこの世界に下りてきたことなど  
知らずに。

神々は退屈を嫌ってこの世界に神界から下りてきた。周知の事実である。

実際に彼らはこの世界に下りてきてからは眷属を得て「ファミリア」をつくり子供達  
との生活に満足していた。

—そうある時までは。

必然だったのだらう。

神々は満足こそしていたが新たな娯楽を探していた。そしてある時思いついた。

（珍しい眷属得て他の神に自慢したら楽しいんじゃないかね？つかその子供がダンジョンで  
めっちゃ強かったら楽しくね?!」

等と。

そしてそんな神の元にある種族の噂が届いてしまった。その種族の名は龍人族。

見た目こそ人とさしてかわらないが尾が生えておりその尾は鱗で覆われており、その種族の多くは魔法を使い、そして力も多種族より強い。またその種族の多くはプライドは高いものの争い事が嫌いで多種族を刺激しないために住む場所を定期的に変えたり、秘境のような場所でひっそりと暮らしていると。そして、仲間意識がとても強いと…。

その神は思った。

(なにそれ欲しい)

そして、子供達に命じた。なんとかして眷属になるよう説得しろと。最悪、荒事になっても構わないと。

そして、事件は起きた。

先の神のファミリアの眷属達と龍人族との戦争。

最初は穏やかな説得だったが、次第に脅迫に近いものになり、それに反発した龍人族による眷属達への攻撃。

それがきっかけにより先のファミリアの子供達が暴走し、龍人族の子供を誘拐し、オラリオへ連れ帰り主神へと捧げてしまう。

それを知った各地の龍人族が一同に集い、オラリオに滞在しているあるファミリアへ

と戦争を吹っかけた。

しかし、いくら龍人族の力が強かろうと、魔法が使えようと彼らは恩恵を持たぬ、者。対してかのファミリアは規模こそ中小ファミリアであるが冒険探索をメインとするファミリアでありレベル2、レベル3の冒険者もそこそこいるファミリアである。

数がそこまで多い、いや種族単位でみるとかなり少ない龍人族では勝てないのを目に見えていた。

だが、それでも彼らは死にもの狂いで戦い続けた。武器が無くなれば、素手で、手が斬られれば足で、足が無くなれば歯で。マインドが尽きても、倒れることも気絶することもなく苛烈なまでの意思で戦い続けた。

そんな戦争が3日日間続き、ついに戦争は終わった。

終わりはあつけないものだ。オラリオの最強派閥である「ゼウス・ファミリア」と「ヘラ・ファミリア」が事態の鎮圧に乗り出し、両者を制圧したのである。

その後、手を出した神は強制送還され、ファミリアの解散。また龍人族はギルドによる謝罪と誘拐された子供の返還、そしてオラリオに存在する全てのファミリアへ、「龍人族へ手を出した場合はギルドの持ちうる力全てを持って罰則を行う。」という通告をもつて事態の解決を打診。龍人族はそれを快諾した。しかし、先の戦争の犠牲はあまりにも大きかった。

そもそも龍人族は種族としての数が他の種族と比べてとても少なかった。

個としては恩恵なしでもとても強力な力を持つが弱点として、繁殖能力がとても貧弱である。結果として今回の戦争で流した血は種族の存続としてとても痛かった。さらに、

今回の件でギルドという後ろ盾を経た。が、それに従うファミリアだけではないのもまた事実である。今回の1件で恩恵なしで、恩恵持ちの冒険者を殺した龍神族というのは希少性も相まって、奴隷としての価値がとてつもなく高くなり、まだ力を使えない龍人族の子供を狙って恩恵持ちの冒険者や冒険者崩れが子供を誘拐して闇派閥へ売るという事態も頻発し、結果、龍人族は種族の存続すら危ぶまれる事態へとなった。

そして、そんな事態から長い時間が経ちある一人の男が生まれた。



## 龍人の少年うまれる

龍人族の子供が誘拐され、戦争にまで発展した事件から長い長い時間が経っていた。その長い時間で龍人族は、ゆっくりとしかし確実に種族としての数を減らしていた。

理由は、二つ。

一つ、単純に生殖能力が低く、1人の龍人族の女性からは多くても2人の子供しか生まれにくいこと。また、龍人族は同じ龍人族としか子供を作ることができない。過去には人間の女性と子供をつくった先祖などもいたようだ。がそんな例は長い龍人族の歴史の中でも片手で数えることのできる回数しかなく、例外中の例外である。

二つ、先の戦争での龍人族の人間の戦闘能力を見た神や、富裕層の人間が龍人族の眷属や奴隷を求めて、密かに大金を積んで龍人族を攫ったり、また冒険者崩れの悪党などが高く売れる龍人族を拉致して、闇市などへ売るといったことが増えたことである。

この二つの理由により龍人族は数を減らしている。恐らく多く見積もって現在、龍人族は1000〜1200人くらいしかないだろう。

さらに、龍人族は種族単位でなく家族単位で世界各地を転々としたり、秘境のような場所で生活しているために龍人族同士が出会うことはかなり珍しいことであり、出会い

が少ないのも数を減らしている原因の一つかもしれない。

さて、そんな状態である龍人族の夫婦の下に新たな命が誕生した。

夫婦は少年にボレアスと名づけた。

ボレアスは夫婦のもとで健やかに育っていき、ボレアスが生まれてから3年後また夫婦の下に新たな命が誕生した。

ボレアスの妹にあたるその少女はクシャと名づけられた。

さらに5年の月日が経ち、ボレアスが8歳、クシャが5歳の時、父親からとある話をきくことになった。

話というのは、どうもこの家系は龍人族の中でも極めて高い戦闘力を持つ可能性が高いこと。

また、この家系は古龍と呼ばれた龍の力が自分達に魔法として宿ることが多いということ。

大まかにはこの二つだった。

それを聞いたボレアスは

「ねえお父さん。僕もクシャもまだ魔法を使えないんだけど、なんでなのかな？」

「ボレアスもクシャもまだ小さいからね。多くの龍人族は年を重ねると共に少しずつ魔法の使い方を学んでいくんだよ。だけど、力を使えないことをいいことに子供の龍人

族は怖い大人に襲われることが多いから今日からボレアスとクシャには武器の使い方を少しずつ覚えてもらう。」

そういうと父はボレアスには身の丈を越えるほどの刀と二つの小さなナイフを。

クシャには弓を渡した。

「クシャはお母さんに弓について明日から教えてもらいなさい。そしてボレアスには俺が教えるからね。それと明日から少し旅をするから、二人とも荷物を纏めておきなさい。」

言われた二人は初めての遠出だとはしやぎながら荷物を纏めていく。

旅にでる理由は幾つかある。

この家族は既にここに8年も滞在している。情報が出回っていつここに人攫いがやってくるか分からないというのが一つ。

一つは、子供達が旅に出れるくらいには大きくなったこと。たしかにボレアスとクシャだけでは旅にできることはまだ不可能だが、大人がいればなんとかなる。それに龍人族は基本的に他の種族に比べ早熟である。さらに力も他の種族にくらべるとかなり強い。

なので子供といえどそこらの熊や猪くらいなら武器の使い方さえ学べば狩れるくらいには。

そして最後の理由だが、昔知り合った元冒険者から手紙が届いたのだ。

彼は、冒険者として優秀であらゆる武器を使いこなし、レベル5にまでなった冒険者だが、とある理由により冒険者を辞めざるを得なくなり今は引退し、世界各地を旅していた。

そんな人物からの手紙を見てみると

「よお、久しぶりだな。俺はいまポツケ村という場所で隠居生活をしてる。ここは、オウリオで知ってるやつなんて恐らく一人もいないくらいのも場所だな、あんた達家族でも静かに暮らせるだろう場所だ。住人もみんな優しいしな。ってことでこつちにこないか？それになんかあつたら俺も手を貸してやれるしな。」

と書かれており、ご丁寧に地図まで一緒に挟んであった。

これを見て妻と話し合い家族でこのポツケ村への移住を決意し、明日旅立つことにしたのだ。

手持ちの食料や薬、金などは充分とはいわないが道中で獣や野草をとって食料にするのは慣れているし、金や薬は道中で商人の護衛をして報酬として貰えばいい。今までそうやって生活していたのだし今回の旅もこれまでの旅と変わらないと自分に言い聞かせて父と母も荷物をまとめ始める。

## 別れと出会い。

旅は順調に進んでいた。

途中、熊や猪、鹿などを狩りながらボレアスは父に双剣と大剣の使い方を教えてもらいクシャは母から弓の使い方を教えてもらう。

また、金や薬が底そ尽きそうな時は商人の護衛をして報酬として受け取る。

そんなことを続けながら2ヶ月ほど旅を続け、あと5日間も歩くけば目的地のポツケ村にたどり着くというところまで来た。

そして、夜も更けた所でもいい感じの洞窟をみつけたのでそこで野営することになった。

そこで、先日狩った猪の干し肉を食べつつ家族で休んでいたところで遠くから声が聞こえてきた。

「おい！ほんとなのか！ここに龍人族がいるってのは!!」

この声をきいた瞬間父と母の顔が険しくなり、ボレアスとクシャを連れて洞窟を飛び出した。

そこから無我夢中で走り、逃げる。

しかし、洞窟から飛びだしたのを見られていたのか後ろから怒声が聞こえたと共に、こちらに向って走ってくる音が聞こえてきた。

逃げ切るのは無理だと判断した父と母は自分達が時間を稼ぐから、ボレアスとクシャはこのままの方向へ走って逃げろと言った。

それを聞いたボレアスとクシャは嫌だ、自分達も一緒に戦うと反論したが父が

「お前達がいっても邪魔なだけだ！速く行け！俺たちも後からいく!!」

と叫んだ。

しかし、ボレアスとクシャは走り出せない。それも当たり前だ。まだ8歳と5歳の子供達である。

父と母が強いと知っていても両親を捨てて逃げる決断など出来ない。それに、ボレアスとクシャはなんとなく、不安を覚えていた。ここで行ってしまえば二度と父と母と会えないようなそんな漠然とした不安を。

そんなことをしている間に、足音が止り、盗賊達が姿を現した。

「へへ、てめえらが龍人族か・・へへ、てめえらは死体でも売れば一生遊んで暮らせるだけの大金が手に入るんだ。大人しく、こっちにこりや命までは奪わねえさ。」

「誇り高き龍人族が、そんな真似をすれども？この命、散つてでも子供たちは守り通す。」

「はは、じゃあ子供達もろとも死ねや。こつちはこれでも元レベル2の冒険者だったんだ。恩恵を受けてねえ龍人族なんざ赤子を殺すのとかわんねえさ」

「神の恩恵に胡坐をかけた悪党如き、私の矢で殺してあげるわ」

と母がいった瞬間、ボレアスとクシャには眼で追えない速さで矢が盗賊へ飛んでいくが、その矢が盗賊にあたることなく暗闇へと消えていく。

その様子を見ていた父が大剣を抜くと同時に斬りかかるが、簡単にショートソードで受け止められる。その後何度か斬り合いが行われるが形勢は明らかに父が不利だった。

母もなんとか矢で援護するが盗賊はなんでもないかのように時に払い、時に避ける。

そして、ついに父が盗賊に腹を斬られてしまう。明らかに重症だ。このままでは父は死んでしまう。

ボレアスは「父さん!!」と叫ぶが父はボレアスを見ることもなく

「走れ! いけ! 速く!」と叫ぶ。母も「速く逃げなさい! あなた達だけでも生きるのよ!」

と叫び魔法の詠唱を開始する。盗賊は子供達を逃がさんと重症の父を放ってボレアス達に向うが父が瀕死の重傷であるにもかかわらず死力をつくして盗賊へと刀を振り、盗賊へ切りかかる。盗賊は鬱陶しそうにその剣をショートソードで受け止め、払った後父に斬りかかる。が、それは母の魔法によって防がれる。

しかし、母の魔法も対して効いてはいないのか盗賊は一瞬顔を顰めるだけで父へ向き直り、トドメを刺そうとする。

その様子を見たボレアスはついに決断する。自分の横で泣いているクシヤの手を取り走り出す。

父と母が稼いでくれる時間は無駄にしない。命を賭けて稼ぐ数分、数秒をこれ以上無駄にしない。心の整理はいまだ出来ていない。それでも、生きるため、母と父の命を無駄にしないためにクシヤの手を取り、走る。戦闘の音が聞こえなくなっても走る。夜が明け太陽のが空に上がつてきても走る。走る。走る。走つて、遂に力尽きて倒れてしまった。一緒に走っていたクシヤも限界だったようで自分と一緒に倒れたのが見えた。

そして、倒れた拍子に疲れが一気に溢れてきて、目が自然と閉じていく。ああ・・足音が聞こえる・・だれ・・だろ。

目が覚めたボレアスの目には見慣れない天井が映っていた。

そこで今までの出来事を思い出しクシヤを探すため体をガバツと起こし周囲を見渡すと、隣のベットでスヤスヤと寝息を立てて寝ていた。どうやら自分達はどこか知らない部屋にいるらしい。自分の記憶では、最後は山の中で力尽きていたはずだが誰かが助けてくれたのだろうか。とりあえず命はある。いまはそれで充分だ。

安心してまた体をベットへと預けると、今までのことを思い出し、自然と涙が溢れて



きた。

恐らく、父と母は生きてない。あの盗賊は言っていた。龍人族は死体でも高く売れると。父は恐らく、もうあの傷じや助からない。母も生け捕りになるくらいなら自分の心臓にナイフを突き立てて自殺することを選ぶだろう。龍人族というのはそういう種族だ。もし自分が母と同じ立場なら恐らくそうする。

しかし、わかっていても両親を失った悲しみが消えることは、ない。

涙が溢れてくる。後悔が胸に沸いてくる。もし自分にもつと力があれば、守れたかもしれない。父と母を死なせずに守れたかもしれない。守られることしかできなかった自分に腹が立つ。力が無い自分に腹が立つ。悔しい。だがその悔しさも相まって涙が止らない。

どれくらい泣いていただろうか5分だろうか10分だろうか。

だがその涙は唐突に止ることになる。

今まで閉まっていた扉から男が現れたのだ。それに気づきボレアスはビクと体を震わせて男をみると男は

「お、目え覚ましたかボウズ。いやー焦ったぜ胸騒ぎがするから武器もつて村の外にでてみりや、山の中でボウズと嬢ちゃんが倒れてんだから。死んでるのかと思つて見て見りや擦り傷やかすり傷はあるが、でけえ怪我は無いら、息もあるし、とりあえず俺の家

まで運んだが……ま、無事ならいい。とりあえず自己紹介だな。俺はハント。ハントIIイーガー。一応これでも元レベル5の冒険者だ。」

冒険者ときいた途端、体が震えるボレアス。この前の出来事思い出して、奮えがとまらない。息が荒くなる。呼吸が苦しい。

そんな様子をみたハントは安心させるようにボレアスを抱きしめると優しい声色で語りかける。

「安心しろ。俺はお前達を傷つけない。今はとりあえずゆっくり休め。飯もってくるから。隣の嬢ちゃんももう少しで目覚ますと思うから隣にいてやんな。」

とってボレアスの頭を優しく撫でるハント。その優しい手つきと温もりからゆっくりと震えが収まっていく。そしてそれを確認したハントがご飯を取りに行こうと抱きしめていたボレアスを放すとボレアスが

「助けて、くれてありがとうございます。僕は……ボレアスです。隣にいるのは妹のクシャ……です。」

それをきいたハントは笑顔でボレアスの顔を見てまた頭を撫でる。

「おう、よろしくなボレアス。」

## 自己紹介と怪物狩と修行

ターハンター

モンス

「よし！改めて自己紹介だ！俺はハントIIイーガー。元冒険者で二つ名は【怪物狩】なんて呼ばれてた。一応レベル5でそこそ有名だったんだぜ？」

等と笑う男を見てボレアスとクシヤも少し微笑んで続けて自己紹介をしていく。

「クシヤです。隣にいるボレアスの妹で5歳です。それと・助けてくれてありがとうございませす。」

と言つて頭を下げクシヤ。そしてそれを見て「気にするな。」といつて笑うハント。そんな二人をみてボレアスも二度目の自己紹介を始める。

「さつきも言ったと思うけど名前はボレアスです。8歳です。」

とベットで寝ていた状態とは違い、しっかりといすに座つて自己紹介をした。

実は、ボレアスが目覚めて20分ほどたった後クシヤも目を覚まし、ボレアスと同様に泣き、それをボレアスが慰めつつ、ボレアス自身も暗い顔をしていたとき、ハントが部屋に顔をだしクシヤが泣き止むと同時にどんな状況をクシヤに説明し、

「おし、さてとりあえず飯食うか。最初はこの部屋で食おうかとおもったんだが・・・二人とも大丈夫そうだし、リビングで食うか。自己紹介もいるだろうしな。」

と言出し先ほどのように自己紹介が始まった。

そして自己紹介の後、ご飯を食べ終わり、お茶でも飲むかとハントが暖かいお茶を食卓に並べ、3人でお茶を飲んでいたところでハントが口を開いた。

「ところで・・・なんとなく察しはつくんだが・・・どうしてあんな所で倒れてたんだ？」と聞いたところでボレアスとクシャは俯き今にも泣きそうな顔になるも、ボレアスがなんとか今までのことをボソリ、ボソリと呟いていく。

まずは自分達が龍人族であること。最初は家族でポケット村を目指していたこと。ポケット村には両親の知り合いの元冒険者がいて信用に値する人物であること。また、その人物から手紙を貰ったこと。途中で盗賊に襲われ、両親達が命を賭して自分とクシャを逃がしてくれたこと。そしてハントに助けられたこと。

それらを一通り聞いたハントは俯き「そうか・・・」と呟き、少し目を瞑り、考える

「まず、いまの状況を正確に教える。ここは君達が目指したポケット村だ。そして・・・君達の両親の知り合いの元冒険者ってのは多分・・・というより十中八九俺だ。」

それを聞いたボレアスとクシャは一瞬驚くが、先ほどの自己紹介でハントが元冒険者

であることは知っていたので納得したようだ。

それを見たハントがさらに続ける。

「それで・どうする？俺は君達の両親に大きな借りがあるから、君達がここに居たいっていうならいくらいてくれてもいいし、君達が以前みたいな生活を望むんだつたら生きる術くらいは教えてあげれる。君達は、どうしたい？」

とハントはボレアスとクシヤの目を見て問いかける。

それに二人は少し考えるがボレアスが口を開く。

「ハントさんってレベル5の冒険者だったつてことはすごい強かったんですね・？」  
「ん？ああ傲慢じゃないがそこそこ強い自負はあるし、刀だろうとナイフだろうと弓だろうと全部そこそこ使えるぜ。」

「じゃ、じゃあ・・・僕を、僕を強くしてください!!」

それを聞いたハントは一瞬考えた後、真剣な顔でボレアスに問う。

「それは・・なんでだ？両親を殺した盗賊へ復讐するためか？」

それを聞いたボレアスは一瞬顔を顰めた後、少し考える。確かにあの盗賊は憎い。出来るなら殺してやりたいくらいには。だが今はそれ以上に・・・

「つーたしかにあの盗賊のことは殺したいくらい憎いです。でも・・今はそれより怖いです。これ以上家族を失うのが・・・。自分達龍人族がどんな種族なのかは両親から

聞いて知っています。だから・・・大切な家族を守るための力がほしいんです!!」

それをきいたクシヤも

「・・・ハントさん私からもお願いします。私も・・・私ももうだれも失いたくない!!ボレアスを悲しませないためにも、そして大切な誰かを守るためにも力がほしいんです!!」

それを聞いたハントは真顔から一点笑顔を浮かべると

「そうか。ならない。教えるよ。俺の教えられることを教えよう。ただ・・・もし復讐のためだったら教えなかつたけどね・・・。それで力をつけた後はどうするんだ?冒険者にもなるのか?」

それを聞いたボレアスは強く頷き

「僕は・・・龍人族を今みたいに誰かに狩られることに怯えるような状態から昔、父と母からきいた誇り高く、どんな種族よりも気高い精神をもった龍人族を復活させたい。そのためにもオラリオで冒険者になって、名を上げて、龍人族を照らす星になります。俺の名を、姿を世界に轟かせて今も世界各地に散らばる龍人族たちに勇気を与えられる星に。」

それを聞いたクシヤは強い覚悟感じさせる目でハントに強く頷いた。

「はは・・・そりゃいいな。ボレアス、クシヤ。がんばれよ。やれるさ君らなら。」と笑いながら言った後、明日から修行だから早く休みなど笑いながら言った。

翌朝、3人で朝食をとった後、ボレアスとクシャはハントから自分達で持ってきた各々の武器を渡され、武器の振り方、効果的な獲物の倒し方、また矢を遠くへ飛ばす方法や狙ったところへ飛ばすコツなど色々なことを学んだ。

そして昼には昼食をとり、その後は狩りへでて朝練習したことの復讐を熊や猪などの獣やたまにいる怪物相手に実践し、夜には昼間狩った獣で飯をつくり、翌日に備えて早めに寝るといふ生活を送った。

そして2年ほどその生活を送り、ボレアス10歳、クシャ7歳になり、遂に明日、ハントの手引きにより信用できる行商人に護衛をする代わりにオラリオに連れて行ってもらおうという日になった。

そしてその日も普段と同じ日常を送っていたのだが、夕飯の時、ボレアスがハントに聞いた。

「ハント……今日までほんとにありがとう。でもなんでハントは僕とクシャにここまでしてくれたの?」

「あ……私も気になる。たしかお父さんとお母さんに借りがあるって言ってたけど。。。」  
「ん?ああ……そういえば言ってなかったな……。じゃあ少し昔話をするとうちよいか。」

とハントが自身の過去を話し始めた。

## 怪物狩の過去と旅立ち。

「あー……今から何年前だったかなあ……もう覚えてねえけど。俺、【ゼウス・ファミリア】ってファミリアに居たんだ。」

とって語りだしたハント。それを聞いた二人は酷く驚くが、ハントから修行を受けた身としてハントの強さは十二分に知っている。彼はどんな武器でも使いこなし、二つ名の通り、狩り人のような戦い方をし、獲物を狩る。

徹底的に弱点をつき、少しでも敵に隙が出来ればそこに攻撃をねじ込む。彼の教えも狩人らしいものだった。

「いいか視野は広く持て。常に敵を視界の中心に入れながら、地形の把握に努めろ。強敵と出会い逃げるにしろ、地形を利用するにしろ地形の把握は出来る限り速く行え。」  
「怪物も生きてる以上、弱点がある。その把握を戦いながら行え。それと、それが分からなかったら、まず目を狙え、次に鼻。この二つをつぶせば狩りは楽に出来る。」

これが彼のダンジョンで強敵と戦う際のアドバイスだったし、修行の最中、一字一句覚えるほど教えられた。

そんな彼が最大派閥の一つであった【ゼウスファミリア】の冒険者だったとしてもお



かしくはない。

そしてハントが言葉を続ける。

「んで、うちのファミリアなんだが・・・知つてのとおり【隻眼の竜】の討伐に失敗しちまって、「ヘラ・ファミリア」と仲良く壊滅しちまってなあ・・・んで、仲間の多くも死んじまってどうしようかと途方に暮れてなあ・・・オラリオの外で旅してたんだわ。んで、ある時、【闇派閥】って呼ばれる連中がお前らと同じ龍人族の子供を拉致するのを見つけて、助けるために連中に喧嘩吹っかけてなあ・・・なんとか連中は全員殺して攫われた子供も助かったんだが俺も大怪我しちまって・・・んでそこでお前らの両親が偶々死にそうだった俺の近くを通って俺とその龍人族の子供を助けてくれたんだ。」

とここで一息いれて

「だけどな、そんなときの俺は荒れててなあ。「なんで助けたんだ。」だとか「俺なんか生きててもしょうがねえ。生きる理由がない。」だとかお前らの両親に言っちゃったんだ。そしたらお前らの両親に、説教されちまってよ。「生きる理由がない？子供みたいなことと言うな。大人ならば自分で考えろ」だとか「死ぬ理由に龍人族の子供を利用するな。」だとかさ。それで、なんか吹っ切れてさ、そのまま助けた子供を両親の元に連れて行くっていうお前らの両親の護衛を兼ねて、一緒に旅してたんだよ。それでその旅が終った後、命を救った変わりにもし自分達になにかあったらいつか生まれる子供達を育

てて欲しい。って頼まれてな。それで龍人族でも大丈夫そうなのポケケ村を見つけ、お前ら家族に手紙を送ったんだ。」

と自分の過去を語ったハント。それを聞いたボレアスとクシャは難しい顔をしているが当のハントは苦笑しながら

「まあ過去の話だ。そら、そんな難しい顔してねえでお前らがオラリオに着いた後の予定をもつかい確認するぞ。」

といいながらオラリオに着いた後の予定を確認していく。

「まずは、今オラリオの治安はいつちやあれだがかなり悪い。恩恵なしのお前らが龍人族だと知られたらすぐにやみ派閥に狙われる。だからファミリアに入るまでは、俺が護衛する。ここまでは何回も言ったな？んで次に入るファミリアだが・・・ある程度規模がでかくなるとお前らの後ろ盾として不安だから今、規模を大きくしてる【ロキ・ファミリア】か、【フレイヤ・ファミリア】がいいと思う。それに【ロキ・ファミリア】にはちとコネがあるしな。まあ規模だけで言えば他にも色々あるが・・・探索メインのファミリアだったらこの二つだろう。」

と説明してくれるハントに頷くボレアスとクシャ。それを見たハントは微笑みながら

「よし。じゃ明日も朝早いからな。さっさと寝るんだぞ。」といいながら席を立つ。

そして、二人も寢床へと足を進める。

そしてベットへ入るとクシヤが呟いた。

「いよいよ……だね。明日からやと私とおにいちやんの夢の一步が始まるんだね。」

「うん……そのために、今までハントに修行してもらったんだ……絶対に夢を叶える。」

と、クシヤの呟きに答えて決意を新たに決めるボレアス。

そして翌日

「久しいな。アイルー。オラリオまで頼むぞ。」

「ミヤー。任せとけニヤ！ミヤーの馬車は特別製ニヤ！3日間で届けてやるニヤ！」

とアイルーと呼ばれた猫人族の少女は答える。見た目こそ少女だが昔はハントとパーティーを何度も組むほどの凄腕のレベル4の元冒険者でハントが引退してから商人に転職したらしい。なんでも自身の持つ魔法で場所を引く馬のスピードを上げることができらしく、商人としてだけでなく配達屋としても人気があるらしい。

そしてそんなアイルーに言われ、クシヤと共に馬車に乗り込む。

そして3日日間、ときたま現れる盗賊や怪物をアイルーとハントが見守りながらボレアスとクシヤが対処して、オラリオへの道を進んでいく。

そして、なんどめかの盗賊の襲撃を、返り討ちにした後、ハントから話があると呼ばれたボレアスとクシヤ。

そしてハントの下へいくと

「お前らが持ってきた武器、俺が整備のしかたを教えてやってなんとか使い続けてきたけどそろそろ限界だ。だからホレ。」

といいながらボレアスには双剣と大剣を、クシヤには弓を渡す。どちらもいままで使っていたものより数倍値が張りそうなものであった。

「そいつらは俺がまだレベル2くらいのときに使ってた獲物達だ。もう十何年も前のだが、素材はたしかなもんを使ってるし整備も定期的にやってたからまだまだ使えるぜ。」  
というハントに

「え．．．ほんとに貰っていいの？ハント．．．たしかに今までつかってたのより全然いいものだっていうのはわかるけど．．．」

「うん．．．今までの弓よりすぐく手に馴染む．．．それに矢の威力も多分比べ物にならないくらいあがるとおもう．．．」

とボレアスとクシヤがハントに向っていうと

「いーんだよ。それくらいの武器ならいくらでも家に置いてある。それに大人からの好意は無駄にしないもんだ。」

「ありがと！ハント!!」

と声を揃ってお礼をいっただとこでアイルーから

「速く乗るニヤ！もうあと少しでオラリオに着くニヤ!!」  
と言われ3人で馬車へと乗り込む。

## 龍人オラリオに立つ

天高く聳え立つ巨大な塔バベル。

それを中心に街が形作られ、そこで多くの人々が生活をしている。

【迷宮都市オラリオ】

その街の入り口にボレアスとクシヤ、そしてハントの3人が漸くたどり着いた。

アイルルはさきほどハントから代金を貰うと同時にすぐに街の中に消えていった。

「ここが・・・オラリオ・・・迷宮都市」

「すごい人だね。お兄ちゃん。迷子になったら大変だ。」

とボレアスとクシヤが呟いてそれに答えるハント

「ああ。今までお前らがいたことは比べ物にならないくらい人が多いだろうな。ま、とりあえず腹ごしらえだ。行くぞ。ちゃんと見失わず着いて来いよ。」

といつて歩き出すハント。そしてそれに慌てて着いていくボレアスとクシヤ。

ちなみに今の3人の格好はハントは着慣れた装備の上から顔まで隠せるフードつきのローブを羽織って顔を隠している状態で、ボレアスとクシヤは狩りに行く際の格好にフードなしのローブを羽織っている。

理由はハントはオラリオでは顔が知られている存在なので声を掛けられるのが面倒だという理由。ボレアスとクシャは尻尾を隠すためである。たしかにオラリオでは色々な種族が共存しているが龍人族の尻尾は少し特殊で極端に短く全体が鱗に覆われているというもので一目で龍人族だとばれてしまうのでこのような格好をしているのだ。

そしてそんな不審者の様な格好をした3人組が歩くこと15分程、ハントが冒険者時代に通っていたと言っていた定食屋へと到着する。

「いらっしやいませー3名様でよろしかったでしょうか?…ってハントじゃない!どうしたの?それと横の子供達は?」

「ああ久しぶりだなメラルー。ちよつとこいつらの保護者としてオラリオまで来たんだ。とりあえず席に案内してくれ。」

「あ、ああごめんなさい。ではこちらへどうぞ。」

そう言われて席へと案内された3人。自分達の他にも何人か客がいたのだがみな自分達の話に夢中なようでハントの名を聞いても反応していないのを確認してハントはほつとため息をつく。

そうすると先ほどメラルーと呼ばれた猫人族の少女の店員が注文をとりに来た。

「ご注文はお決まりでしょうか?」

「俺は日替わり定食で・・・ボレアスとクシヤもそれでいいか？ん。じゃあ日替わり定食3つで。」

「はい。じゃあ少しお待ちください。」

といてオーダーを厨房へ伝えると再びこちらの席にきたメラルー。

ター  
モンスタターハン

「ハントこの子たちの保護者代わりっていったけど・・・まさか【怪物狩】の復活かしら？」

「いや、冒険者に復帰するつもりはねえしこいつらの付き添いが終わったら俺はすぐオラリオから出てくよ。」

「ふーん・・・。あ・・・そういえば君達名前は？」

とボレアスとクシヤに訪ねてくるので名前を答えるボレスとクシヤ。

「ボレアス君にクシヤちゃんね。覚えてたわ。それで君達はなににオラリオに？」

「えつと・・・僕もクシヤも冒険者になりました。」

「へー・・・その年でねえ。・・・ま、なにか事情があつて子供の頃からダンジョンに潜るなんて珍しいことでもないし・・・ま、頑張つてね。」

といい終えた途端、他の席の客から声がかかり注文を取りに行つたメラルー。その後



こちらの席に戻ってくることはなく、5分ほど経ったら別の店員が料理を持ってきた。

今日はから揚げ定食だったらしくから揚げ5つと白米、漬物、それに味噌汁。あと野菜炒めが小皿に入っているという内容だった。味は大変おいしく、特にから揚げは絶品だった。

そのため、ボレアスとクシヤは若いこともあつてすぐに食べ終わってしまった、それを見たハントが苦笑いしながらボレアスとクシヤに一個ずつから揚げを渡した。

そしてハントも食べ終わるとまたもやメラルーがやつてきた。

「どう?おいしかったでしょ?」

「ああ久しぶりに食ったがやっぱうまいな。この店の飯は。ボレアスとクシヤもうまかったのか一瞬で食べ終わってたぞ。」

「あら、それは良かったわ。それでこの後はどこへいくのかしら?」

「ん、ああそうだな。ちと【黄昏の館】へこいつらを預けにな。」

「【黄昏の館】ってことは【ロキ・ファミリア】の入団試験を受けるの?」

「ああ・・・フィンは信用できる。ガレスとリヴェリアもな。つってもこいつらの腕なら間違いなく受かるだろうけどな。なんたって俺が教えられること全部教えたし、こいつら自身の才能は間違いなく俺以上だ。なんせこいつらときたら教えた武器の使い方を半年と関わらず覚えちゃまってな。たった2年で全部ダンジョンで使えるくらいにはなっ

た。」

「ふくん……って全部?!あなたロングソードに弓、はては槍や刀、双剣なんてのも使ってたじゃない?!それを2年で覚えたって言うの?!」

「ああ。まだ荒削りだがそれはダンジョンで磨けばいいしな。それにこれ以上俺が教えるより基礎だけ固めて後は自分達で自分なりの得物の使い方を考えていったほうが良いしな。」

#### モンスターハンター

「まあたしかにそうだけど……。すごいよね。君達あの「怪物狩」からのお墨付きだなんて。つと・・【黄昏の館】にいくなら長話してる暇はないわね。北のメインストーリーまでいくならハントはともかく君達は馬車がないと日が暮れちゃうわ。」

「ああ・・そうだな。もう出るか。お代はここに置いとくぜメラルー。」

「はくい。あ・・そういえば今日、ロキファミアが朝から入団試験をするって噂になってたわね。今からいけば間に合うんじゃない?ま、間に会わなくてもハントが口利きすれば受けさせてもらえると思うけど。」

「ん?そりやちようどいいな。俺の口利きなしで受けれるならそつちのが都合がいい。んじやご馳走様メラルー。」

「はーい。じやがんばってねボレアス君、クシヤちゃん。」

そういわれて軽く頭を下げたボレアスとクシヤ。その後街中で捕まえた馬車で【黄昏の館】へと向う3人。

そして車内で雑談すること2時間ほど、ついに【黄昏の館】へと到着する。

そして、門番へとハントが声を掛ける。

「あー。今日、朝から入団試験があるって聞いたんだが？」

「ん？入団希望者か？残念ながらもう受付は大分前に終ってしまったんだ。次の機会に受けるといい。」

「そこを何とかできないか？ちと分けありで時間に遅れちまったんだがこの二人に試験を受けさせたいんだが・・・」

「その子供二人をか？正気か？お主ならまだ分かるが・・・たしかに得物はもっているようだが【ロキ・ファミア】は探索メインのファミアだぞ？」

「百も承知さそんなの。というよりどうにか二人だけ受けさせれないか？」

「私も受けさせたいが・・・ここで特例を認めてしまうと他の者から批判されてしまうかな。決まりは決まりだ次の機会を待て。」

「んーそれもそうか・・・」

とここまできてハントが自分の名を利用しようとした時、

ロキ side

「あーすーいー」

と超棒読みで感想を漏らすのはこの「ロキ・ファミア」の主神である神ロキ。

今日は1年に数回しか行われない「ロキ・ファミア」の入団試験の日で朝から受付を行い、今は「黄昏の館」にある修練場で希望者達と団長のフィンとの入団試験を眺めていたのだが、あまりにも退屈である。

それもそのはず、「ロキ・ファミア」は「ゼウス・ファミア」と「ヘラ・ファミア」が壊滅してから勢力を伸ばし「フレイヤ・ファミア」とこのオラリオにおいて二大派閥を形成しており、そのため入団希望者も80人を越える。

その多くは冒険者になって一攫千金だとか名誉だとかを夢みているのだろうが、そんな生半可な覚悟ではすぐにダンジョンで死んでしまう。そのため、覚悟充分でなおかつ強くなる可能性が高いものを団長であるフィンが直接、模擬戦で見極め、それを副団長であるリヴェリアと最古参のガレス、そして主神であるロキも観戦して合否を判断するのだが・・・今年は例年より希望者のレベルが低かった。正直にいうと見所が一個もな

いまま、手加減しているフィン相手に寸止め等をして勝ち誇った顔をした希望者達に冒頭のような感想を棒読みで伝えるという作業を80回以上も行っていった。

隣にいるリヴェリアとガレスもあきれた顔をしながら首を振っている。理由は、ロキと同じく、今年の希望者達のレベルの低さだろう。フィン是对戦前に「僕を殺す気がかつてきてほしい。」と伝えているのにも関わらず手加減しているというよりわざと負けているフィンに勝ち誇った顔をしている希望者達。そもそもレベル6の冒険者のフィンが恩恵なしの多少鍛えている程度の希望者達の攻撃を食らっても傷一つつかず、痛くも痒くもない。当たり前のことだがそれがわかっていない希望者達の多さに呆れている3人。ロキにいたってはもう模擬戦を見ることすら放棄して辺りを見回していた。

(はー暇やなあ……前回、前々回よりもつまらへんなあ……ん?)

「リヴェリア。」

「なんだ? ロキ。」

「なんか門で言い合つとるで。ちよいと様子みてきてくれへん?」

「はー……一応私も副団長として試験を見ていないといけないんだがな。」

「ええやろ。こんなの。どうせ合格者0やし。」

「分かった。では見てくるとしよう。」

と行って歩き出すリヴェリアを見つめるロキ。そして、門番のかわりに先ほど門番と言いつ争っていた人物と3分ほど話しすとロキの元へ戻ってきた。

「どうやった？」

「10歳くらいの子供2人を入団試験に受けさせて貰いたいと頼み込んできた。一応、主神に聞いてみるとは言ってみたが。どうする？」

「子供？拒否や拒否。よっほどの美少年、美少女じゃないかわり。もうこれ以上退屈なもんみたないわ。」

「ふむ。そうか……。ちなみに私が見た限り、かなり将来有望な少年と少女だったぞ。」  
「なんやと?!うちが直接確認してくる！」

と行って門へと走りだすロキ。

それを見てはあとため息をつき

「ガレスすまんが少し離れる。後は頼んだ。」

といい追うリヴェリア。

ボレアス達 side

「おーなんやかなりの美少年に美少女やないか!!」

といいながら突然こちらへ走ってきたオレンジ色の髪で糸目という整った顔立ちを

しているが体は男性と間違うほどの絶壁の女性。

「こらロキ。突然走り出すな……。一応まだ、試験の途中なんだぞ。」

といて遅れてやってきた緑髪でエルフの特徴である長い耳をした絶世の美女。

さきほどロキといわれた女性がボレアスとクシヤに向って

「なんや二人とも試験受けたいんか？ええよ受けても。あ・そういうえば自己紹介がまだやったな。うちがこの「ロキ・ファミリア」の主神のロキや。そしてこつちが副団長のリヴェリアや。」

「おい。ロキ、本当にいいのか？」

「かまへんかまへん。うちがなんとかしたる。それに、このロープの男……ただものじゃなさそうやしな。」

といてハントを睨むロキ。睨まれたハントは苦笑しながら

「そんなたいしたもんじやないよ俺は。ただの元冒険者でこの二人の保護者代わりだ。」  
とだけいって黙った。

だがまだハントを警戒しているロキを見てため息を吐くと

「聞いていたな？私はこの「ロキ・ファミリア」の副団長のリヴェリア・リヨス・アールヴ。リヴェリアと呼んでくれ。それでお前達は？」

「僕はボレアス。10歳です」「私はクシヤです。ボレアスの妹で8歳です。」

それを聞いたリヴェリアは少し驚き

「名だけか？性はないのか？」

その問いに答えたのはボレアスでもクシャでもなくハントだった。

「ミラ。そいつら二人の性だ。ミラ・ボレアスとミラ・クシャ。それがそいつらのフルネームだ。」

そしてそれを聞いた途端、ロキとリヴェリアが驚く。それとボレアスとクシャは両親から教えられることのなかった名に自分達も驚いていた。たしかにおかしいとは思っていたのだが、まさかハントに教えられるとは思っていなかった。

「リヴェリア、事情が変わった。わかっているやろ？急いで試験やるで。それとその男後で、事情教えてもらうで。逃げるんやないぞ。」

言われたハントは軽く肩を竦めて了承した。

「ロキ……。ああわかった。ではボレアスにクシャ着いてくるといい。こちらで今から試験を行う。」



## 入団試験

「フィン。少し話がある。」

ちやうど希望者全員との模擬戦を終えたフィンにリヴェリアが声を掛ける。目を向けるとリヴェリアの後ろには2人の子供と一人の男、そしてその男を警戒するかのように見えるロキの姿があった。

「どうしたんだい？リヴェリア。それに後ろの方達は……」

「ああ、この後ろの子供達に入団試験を受けさせたい。今から頼めるか？」

「別に構わないけど……いいのかい？ロキ。」

【ロキ・ファミリア】は今では【フレイヤ・ファミリア】とならんでオラリオ屈指のファミリアであり、そのファミリアが本来の入団試験に間に合わなかった者に入団試験を受けさせる。そんな鼻屑を行ったと広まれば【ロキ・ファミリア】の評判が下がったり、もしかすれば今から試験を受けるこの子供達に手を出す悪党がいなくても限らない。そのため主神であるロキに確認したのだが……

「かまへん。それより、早く始めてくれへんか？ガレスは試験終った冒険者達を帰らせといてや。どうせ合格者0やろ？」

「まあ、そうなんだけど一応今から審査するっていつて待たせてるんだけど・・・」

「適当にガレスがあしらうやろ。そんなことよりフィン、団員に武器もつてこさせーや。試験やるで。」

「はあ・・・わかった。じゃあ・・・君達二人は少し待つててくれ。今武器を用意させてるから・・・。ところで名前はなんていうんだい？」

「ミラ・ボレアスです」

「ミラ・クシャです」

「ボレアスにクシャだね。よし・・・武器も用意できたみたいだし行こうか。」

と言い歩き出すフィンに続いて修練場に入るボレアスとクシャ。さらにリヴェリアとロキ、ハントも続いて修練場に入ってくる。

「よし。好きな武器を取るといい。」

といい団員に用意された武器を見せるフィンそしてそれを注意深く観察するボレアスとクシャ。すると突然ボレアスが口を開いた。

「すいません。武器を2つ使うのは禁止でしょうか？」

「いや、別に構わないさ。2つでも3つでも使うといい。」

「わかりました。ありがとうございます。」

といいまた武器選びに戻るボレアス。クシャは先ほどのボレアスとフィンの会話を

聞いて、弓の他に短剣を持ち待機していた。

ボレアスも3分程で選び終えたようなのでフィンが声を掛ける。

「二人とも選び終わったかい？」

その問いに「はい。」と答える二人。ボレアスは両手にナイフを持ち背中にロングソードを斜めに背負っているという姿。どうみても自分の背丈を越しているロングソードなど明らかに子供が使う武器ではないがかれなりの考えがあるのだろうと思い、クシヤに目を向けると彼女は弓の他には短剣一本とボレアスと比べると少々地味だが、遠距離も近距離も対応できるようにしているのがよく分かる装備。

そんな二人の観察を終えたフィンが改めて口を開く。

「よし。じゃあ今から試験を始める。試験内容は僕と1対1での10分間の模擬戦。それと、模擬戦ではあるけど僕を殺す気がかかってきて欲しい。」

殺す気できてほしいと聞いた瞬間ボレアスとクシヤの目つきが変わる。それを見たフィンは先ほどの希望者達より期待が持てるな、と内心で呟きながら

「じゃあ、まずはボレアスからいこうか。」

と言われナイフ2本を両手に逆手持ちで構えるボレアス。それに相対するフィンも片手でショートソードを構える。

「じゃありヴェリア開始の合図を頼むよ。」

「わかった。両者準備はいいな?」

といわれ頷くボレアスと「うん。」と呟くフィン。

「では、試合開始!!」

トリヴェリアが言った瞬間、全速力でフィンに突っ込むボレアス。狙いは喉元。最高速でフィンに近ずき、右手でもつナイフをフィンの喉元目掛け横から斬りつけるように振る。寸止めなどすることなく、殺すつもりで。

だがしかし、放った斬りつけが狙い通りにいくことはなく、フィンのショートソードで防がれる。そのまま鏢迫り合いになるかと思われたが、ボレアスは防がれた衝撃を利用して半歩後ろへそれた。そして間髪いれず、体勢を低くし、フィン目掛けて一歩踏み出す。次の狙いはフィンの心臓。心臓にナイフを突き刺すため、フィンの懐に入り込み、心臓目掛けて左手のナイフを振りかざす。が、それも簡単に、フィンのショートソードにまたもや防がれる。

その後何度か懐に入って一撃を狙ったが全て簡単に防がれてしまっていた。恐らく恩恵の有る無しに関わらず、武器を使う技術の差は圧倒的にフィンが上。当たり前だ相手は二大ファミリアの団長。だが、フィンは防ぐだけでこちらを攻撃してこない。ならば一泡吹かせてやろうと、背中のロングソードを使うことを決意し、フィンから距離を取る。

(さつきまでの希望者達よりよっぽど冒険者としての才能がある。)

とボレアスの攻撃をいなしながら考えるフィン。

(最初の喉元への攻撃。その後の心臓への攻撃。その後も目、足、腕へと続いたボレアスの攻撃その全てが全て明確な殺意をもって振るっていた。先ほどの希望者達のように自分と相手の力量差を測れず、寸止めなどして勝ち誇ることなく、相手との力の差を理解差しているのも高得点だ。それに僕が防いだ後、癖なのか反撃を警戒してすぐに武器を構えるのも良い。冒険者に必要な警戒心をこんな年で持っている。それにナイフ捌きはまだ荒削りだが、恐らくレベル2冒険者、もしかしたらレベル3冒険者に匹敵するレベルだ。)

等とボレアスの攻撃を防ぎながら考えているとボレアスが模擬戦が始まってから初めて距離をとった。そしてなにかを決意した顔をしている。

(やつとロングソードを使うのかな？僕としては充分合格点なんだけど時間はまだ残ってるからね。楽しませてもらおうかな。)

といいながらショートソードを構えなおす。

「なありヴェリア。あれほんとに10歳の子供か？さつきまでの希望者との模擬戦がお

遊びに見えるで。」

「あ、ああ私も驚いてる。なあクシヤお前もあれだけ戦えるのか?」

「私は、お兄ちゃんみたいに接近戦するより、弓矢が中心だからあそこまではできないです。でも弓矢はお兄ちゃんより得意です!」

「そ、そうか。らしいぞロキ。」

「・・・もう二人とも合格でええんやないか?リヴェリア。」

「ああ、私もあれを見せられたらそう思う。」

と驚くロキとリヴェリアをよそにクシヤが呟く。

「でも・・・なんかお兄ちゃんいつもよりちよつと窮屈そうな戦い方してる気がする。」

それを聞いたロキは

「はあ?!あれで窮屈そうやって?普段はもつとすごいんか?!」

それを聞いたハントが呟く。

「多分、武器の差だろうな。いつも使ってる双剣じゃなくただのナイフを両手に持つてるからな。長さや重さ。そのわずかな差のせいで窮屈に戦ってるように見えるんだろう。まあボレアスもクシヤも天才だ。だから自分達で気づかないうちに使ってる武器にあわして体が勝手に動くんだろうな。」

それを聞いていたリヴェリアやロキは驚愕し、クシヤのみが「ふーん」と理解してい

ないような声を上げていた。

そして正気に戻ったりヴェリアとロキがハントを問い詰めようとした時、ハントがまた呟く。

「聞きたいことは後で全部説明するから今は試合を見てやれ。ほら、ボレアスが仕掛けるぞ。」

フィンと一旦距離をとったボレアスは一息ついて、両手のナイフを構えなおし、フィンへと突っ込む。

そして両手のナイフを上へと構え、加速の勢いのままフィン目掛けて振り下ろす。それに対してフィンは下からの切り上げで両方のナイフを防ぎ、そのまま振りぬく。そしてその切り上げの衝撃を利用してボレアスは上へと飛ぶ。

（狙い通りだ。）とボレアスは内心で笑う。

そして空中から両手に持っていたナイフをフィン目掛けて投げる。フィンは少し驚いた顔をしていたが難なく、投げたナイフを捌く。だがナイフを捌いてる間にボレアスの準備は終っていた。

ロングソードを空中で抜くと自由落下も利用しフィンへと全力でロングソードを振

りぬく。

フィンは一瞬でこれは片手では防げないと思ったのか両手でショートソードを握りボレアスを迎え撃つ。

そして、修煉上に轟音が響いた。

その音にロキとリヴェリア。クシヤが顔を顰め、瞬きした後、目の前には折れたロングソードが転がっていた。

そして

「くっそー！両手を使つてはもらえただけど武器のほうが耐えられなかったんじゃしようがないな。」と笑うボレアスと

「僕もまさか両手を使うことになるとは思わなかったよ。それに、ボレアス、あんなロングソード使えるなんて君何者なんだい？あきらかにあれは君くらいの子供が振る武器じゃない。」

「……その辺は合格して入団できたらちゃんと話します。」

「……そうか。わかった。」

「じゃあ次はクシヤの入団試験だけど……」

「やらんでええんやないか？ボレアスがあればだけやれたんや。クシヤちゃんも強いやろ多分。」



「そういうわけにもいかないよロキ。団長としてそこは譲れない。」

「はあく頭かつたいなあフィンは。わかったわ。じゃあクシヤちゃん準備しいや。」  
「わかりました。」

と答えて弓を構えてボレアスと入れ替わりでフィンと相對するクシヤ。

## 入団試験②

「ルールは先ほどのボレアスのときと同じだよ、殺す気で来てほしい。じゃあさつきと同じで開始の合図は頼むよりヴェリア。」

「ああ。じゃあ二人とも準備はいいか？」

その問いに「はい。」と答えたクシヤと「うん。」と答えたフィン。

「では、試合開始！」

とりヴェリアがいった瞬間、クシヤはバックステップで距離ととりつつ矢を放つ。当然、難なく矢を短剣で弾くフィン。そして、矢を弾かれる前から二射目を準備していたクシヤ。

そして二射目が放たれたのだが、明らかに一射目よりは速い矢にフィンは一瞬、驚くが難なく弾く。その直後魔力を感じてクシヤを見るとクシヤが引いてる矢から微力な魔力を感じる。

そして放たれた三射目の矢は明らかに、さきほどの2射より速く、かすかに風属性の魔力を感じる。咄嗟にその矢を避けたフィン。それをみたクシヤは当然のように構えていた矢をすかさず放つ。

だが、一瞬動揺していたフィンだが一瞬で正気に戻り、矢を弾く。

そして、その矢が弾かれた瞬間に新たな矢を放つと矢を放つと同時に短剣を抜き、走り出すクシャ。フィンが矢を弾くと同時に出来る一瞬の隙。それを狙い、短剣で突きを繰り出すクシャ。

だが矢を弾くと同時に、体を横にそらし突きを避けるフィン。そのまま何度か斬りあいになるもボレアスほどの技術も力もなく簡単に弾かれる。そしてそれを察してまた距離をとり弓矢を取り出すクシャ。

そして一息吸い、矢を放ったクシャ。そしてすぐにもう一本の矢を構え、放つ。2射目は魔力を込めた矢。そして1射目は普通の矢。当然2射目の矢のほうがスピードが速く、1射目の矢と同時に2射目の矢がフィンに届こうとしていた。

(驚いたな。この年で恩恵もなしに魔法を使ってくるなんて。それに弓の腕も良いし、思い切りの良さもある。だが、ボレアスに比べると劣るけど充分合格点だね)

と距離をとったクシャを見ながら考えるフィンだったが次の瞬間に放たれた矢を見てこの感想を間違いだと実感する。

二射の矢がまったく同じタイミングでフィンの体に迫る。通常はありえない。当たり前だ。二本の矢を同時に放つわけではなく、1本ずつ打ち、2本の矢が同時に相手を

貫く。それをするには1本目の矢を上回る速度で2本目の矢を放ち、なおかつその速度差を考慮し2本目の矢を放つタイミングを見極めねばならない。1秒いや0.1秒ずれただけでそれは同時に相手を貫くことはない。だというのに目の前の少女は0.1秒のズレすらなくそれをやってのけた。

(まったく・・・この年でこれとは成長したら恐ろしいね。)

等と思いつながら難なく同時に自分に到達した矢を弾くフィン。

そして口を開く

「時間はまだあるけどここまででいいだろう。2人とも試験は合格だ。それでいいかな？ロキ、リヴェリア。」

「あ、ああ私は構わない。ロキも問題ないだろう？」

「うちもかまへんよ。ただ、少し話したいことがあるし、入団はまだやな。ようは面接や。」

「そうだね。僕も聞きたいことがあるし、ガレスが戻ってきてから面接をしよう。あ、それとこのボレアスとクシヤの保護者さんも一緒にね。」

といいハントの方を見るフィン。

ハントは短く「おう」とだけ答える。

そして、5分ほどしてからガレスが修練場に戻ってきたのでみなで「ロキ・ファミリ

ア」の会議室へと移動し、面接が始まる。

まずは先ほど居なかったガレスの自己紹介が始まり、次にロキが口を開く

「いい加減アンタもフード取れや。まがりなりにも神やでこつちは。失礼ちやう？」

といわれたハントはそれもそうかと呟きローブを脱いでから

「よう。久しぶりだなフィン、リヴェリア、ガレス。それとロキ」

ローブを脱いだハントの顔をみて驚く4人。

その中で真つ先にロキが口を開く。

「あんたゼウスのとこの冒険者やないか！最近、名前きかへんとおもうたらなにやってんねん！」

「ああ・・・ちとオラリオの外を旅してたんだが、訳あってボレアスとクシャに修行をつけてた。」

「なんやねん訳あつてつて！んなことより、なんであんたがボレアスとクシャさんの性を知ってたんや。」

とハントを睨むロキ。そして急に呼び名が変わったクシャが一瞬驚いてだがすぐに真顔に戻る。

そんなロキを嗜めるようにフィンがまあまあいいながらハントに顔を向けて

「本当に久しぶりだね。ハント。それで、ボレアスとクシャの種族はなんなんだい？ま

だ子供なのに恩恵もなしにロングソードを振る腕力に加えて魔法も使える。見た目は人間だが、普通の人間の子供じゃとてもじゃないがそんなことが出来るとは思えないんだけど。」

その言葉を聞いてボレアスとクシャの方を見ると二人ともハントの方を頷く。それを見たハントも二人に頷き返し、再びフィンを見返し口を開く。

「多分リヴェリアとロキは感づいてるだろうが、こいつらは龍人族。それもミラの名を継ぐ一族の龍人族だ。」

それを聞いたロキは「やっぱりか・・・」と呟きリヴェリアは何か難しい顔をしている。

そして龍人族と聞いた瞬間こそ驚いたフィンとガレスだがミラという言葉に対して疑問を抱いた。

「ロキにリヴェリア、ミラの名というのは一体なんなんだい？」

「儂も知らないな。なんじゃそのミラの名とは。」

そんな二人の言葉を聞いたリヴェリアが口を開こうとするがロキが遮って話始める。

「ええでリヴェリア。ウチが説明する。それとハントやったな。あんたミラの一族の説明はボレアスとクシャたんにはしたんか？」

「いや。俺も詳しくはないからな、こいつらの両親に軽く説明されただけだ。」

「ほーん。ま、ならええわ。いいかまず簡単な説明やが龍人族つてのは基本的には、龍の力の一部を使うことができるつてのは知ってるな？それで龍人族が使える龍の力つてのは一族によつて違うんや。それはその一族がどの龍を祖先に持つかで違うんや。例えば火を使う龍が祖先であれば火の魔法を使う者が多い。ま、そんな感じや。」

それを聞いたフィンとガレスは頷く。

そしてフィンが口を開く。

「それでミラの一族つていうのはどの龍を祖先にもつんだい？」

「祖龍や。全ての龍の祖となったと言われる龍。ミラ・ルーツを祖先に持つ一族や。正直、祖龍つてのは神に近い生き物や。そしてミラの一族つてのはその龍とその龍が生んだと言われる古龍と呼ばれる龍の力を使う者が多いんや。そして龍人族の中でも一番強力な力を持つ一族でもある。」

「ちよつとまつてくれロキ。神に近い龍を祖先に持つだつて?!それじゃあまるで・・・」  
「ああ。今よりはるか昔の時代の龍人族。それもミラの名をもつ一族は精霊並みの力を持つてたんや。だがその力を振るうことを嫌い秘境みたいなどで住んでたんやけどな・・・あのアホ神と眷属達が起こした戦争で最前線に立つて戦つたのもミラ一族や。全滅してしもうた思うてたけど・・・」

そしてそれら全部の話聞いたフィンは考え込む。

そしてロキがボレアスとクシャに訪ねる。

「なあボレアスにクシャたん。なんでうちのファミリアに入りたいんや？正直過去を知ってれば神が嫌いになってもおかしくないと思うんやけど・・・」

「ロキ様：僕は、いや僕とクシャは2年前冒険者崩れの盗賊に父と母を殺されました。」  
それを聞いてはっとした顔をしてボレアスとクシャ以外は暗い顔をして下を向く。それもそうまだ10歳と8歳の子供の両親が盗賊に殺されたなどと聞いて暗くならないはずがない。だがそれでも神であるロキが口を開く。

「なら復讐か？恩恵を得て復讐をしたいんか？」

「いえ・・・。たしかに今でも父と母を殺した盗賊の事は憎いです。それほど殺したいほどに。それでも今はそれ以上の夢が2つあります。」

「なんやその夢ってのは？」

「まず一つ目の夢は、星になることで龍人族を照らす星になりたい。」

「星？なんや星てのは？」

「今・・・龍人族はいつ殺されるかもわからない生活をしています。そしてそんな生活の中で昔、父と母から聞かされた誇り高く気高い龍人族の姿は失われつつあります。だから僕が冒険者として名を上げて今も世界で怯えてる同じ龍人族達に勇気を与える星になりたいんです。」



それを聞いたロキは腕を組み目を瞑り少し考え込み、そしてもうひとつの夢を問う。「もう一つの夢は？」

「……もうだれも・大切な者を失わない程の力を得たい。もう誰かを失うのは嫌なんです。」

そしてその答えを聞いたロキはクシヤにも訪ねる。

「クシヤさんは？なんでもうちのファミリアに入りたいんや？」

「私は・お兄ちゃんの力になりたいんです。それにお兄ちゃんと同じでもう大切な誰かを失うのは嫌なので私も誰かを守るくらい強くなりたいです。あの日、私とお兄ちゃんを守ってくれた父と母のように強くなりたい。」

その言葉を聞いたロキは

「嘘は……言うてないな。どうや？フィン。」

と微笑みながら団長であるフィンへと問うロキ。

「いまさら聞くまでもないだろう？ロキ。それに答えはみんな同じ筈だ。そうだろ？リヴェリア、ガレス。」

と満面の笑みで副団長のリヴェリアと最古参であるガレスに問うフィン。

そしてそれに笑顔で頷くりヴェリアと「おもしろそうな新入りが入ってくるな」と豪快に笑うガレス。

そして団長のフィンが頷いて改めてロキへと向かいあつて「だそうだよロキ。後はロキ、君次第だ。」と微笑んでいうと「そんなもん決まつとるやろ！ボレアスにクシヤたん！今、この瞬間から二人ともウチの子供や！」

そんなロキに向つて涙目になりながら

「ありがとうございますロキ様。」と頭を下げるボレアスとクシヤ。

そしてそんな二人に向つて

ファミリア

「もうそんなかしこまらないでええで！こちらは家族になるんやからな！ほらフィン達もただ見てないでなんか言えや！」

「そうだね。改めてようこそ「ロキ・ファミリア」へ。それとさつきロキがいった通りこれから僕たちは家族になるわけだから気軽にフィンと呼んでくれて構わないよ。家族にさん付けされるのもいやだからね。」

と笑いながらいうフィンに続いてリヴェリアとガレスも

「ああそうだな。私のこともリヴェリアで構わないぞボレアス、クシヤ。」

「そうだな。農のこともガレスと気軽に呼んでくれ。」

そして最後にハントが笑いながらボレアスとクシヤに向つて

「よし！お前らの夢の第一歩が叶ったな。よく頑張ったなお前ら。偉いぞ。」

といいながら二人の頭を撫でる。そしてそんなハントに向ってクシヤが

「ハントはこれからどうするの？」と聞くとハントは

「んー、俺はちと昔の知り合いを訪ねる旅に出るよ。何年かしたら合いに来るからそれまでに冒険者として名を上げとけよ？」と笑いながら言う。

そしてそんなハントに向ってボレアスとクシヤは「うん」と笑いながら頷く。

そして最後にハントがフィンに向って

「フィン2人を頼んだぞ。たった2年の付き合いだがいづらは俺にとつちや自分の子供みたくないもんだ。なんかあったら承知しねえからな。」

「わかってるよ。二人は「ロキ・ファミリア」が全力で守っていく。」

「なら、いい。んじやあんま長く居るのもあれだし、俺は出てくぜ。」

そういうと部屋から出て行こうとするハントに向ってボレアスとクシヤが

「今までありがとうハント！次に会うときはハントを越えるくらいの冒険者になつてから！」

「ありがとねハント！私もお兄ちゃんに負けなくらい頑張つてすごい冒険者になるから！」

そしてそれを聞いたハントは笑いながら二人に手を振って部屋から出て行った。

そしてハントを見送った2人に向ってロキが

「よし！じゃあ今夜は二人の歓迎会やな！フィン！今夜の夕食は豪華にするようにいうとくんやで！それとボレアスとクシャたんは歓迎会終つてシャワー浴びたらウチの部屋にくるんやで！」

そういうとロキは今夜の歓迎会のために酒の買出しに行くといつて出て行つた。

そしてそんな2人に向ってフィンが

「つていうことだから、リヴェリアに風呂場までつれていつて貰つてくれ。僕はまだ仕事もあるしガレスも団員達の稽古があるからね。」といいフィンとガレスも部屋から出て行つたので大人しくリヴェリアに風呂場までつれていつてもらふ二人だった。

## セクハラと歓迎会

「ここが風呂場だ。男湯と女湯で別れてるから、それぞれゆっくりと湯船に浸かって疲れを取るといい。」

「といって風呂場から離れるリヴェリア。どうやら二人が出てくるまで外で待っていてくれるらしい。」

「なので二人ともお言葉に甘えてゆっくりと湯船に浸かっていたのだが・・・なにやら女湯のほうからクシヤの悲鳴がきこえてきて急いで男湯から飛び出るボレアス。」

「クシヤ! どうした?!」

「といって風呂場からでたボレアスの目に入ったのはリヴェリアに拳骨を落とされてるロキとタオルで体を隠して涙目でロキを睨んでいるクシヤの姿だった。」

「え・・・ええとどういう状況? これ。クシヤはなんでロキ様を睨んでるの?」

「あ! お兄ちゃん! それがお風呂はいつてたら急にロキ様が入ってきて抱きついてきたの!!」

「ええ・・・。どういうことですか? ロキ様」

「というボレアスの問いに答えたのはロキではなく、リヴェリアだった、」

「すまなかつた。ロキは少し変わった性癖だな。自分の気に入った女性に対してセクハラを行うんだ。酒を買いに行つたと思つていたがどうやら風呂場に待機していたらしい。まったく、まだ恩恵も与えてない団員にまでセクハラを行うとは……」

「ええやん！今日から家族なんやから抱きつくくらい！なんや！何が悪いんや!!」  
「何も良くない!!まったくクシヤが怖がつてるじやないか……。さあ二人ともロキは私が見張つておくから今度こそゆつくりと入つてくるといい。湯冷めしても不味いからな。」

そういわれて今度こそゆつくりと湯に浸かつて温まる二人。

そして湯からでた、二人をリヴェリアが出迎えてくれた。

「どうだ？二人共疲れはとれたか？」

「はい。こんな広い風呂は初めてだったのでとても気持ちよかったです!。」

「私も気持ちよかったです!今度はほかの団員の人達とも入つてみたいです!。」

「そうか。それはなによりだ。それとクシヤ済まなかつたな。ロキのあれはもはや一種の災厄だと思つて我慢してくれ。」

「わ、わかりました……。」

「では、食堂へ行こう。二人の歓迎会の準備も終つたらしい。今夜はご馳走だぞ。一杯食べるんだぞ。」

「はい！」

そういつてリヴェリアに連れられ食堂へと向う2人。道中、通った部屋の説明なども受けながら食堂へと向かうと10分程で食堂へと到着した。

「どうやら食堂には既に多くの団員が揃っているらしい。なんでも、ロキの「飯はいるもんみんなで食う」という方針でどうしても一緒に食えることができない団員を除いてみなので一緒に食卓を囲むのが「ロキ・ファミリア」の掟らしい。」

その説明を聞いていると一足先に食堂へ着いていたらしいフィンとロキが見えた。

「お、きたきたーボレアス、クシヤたんこつちやーこつちー！」

「はあ。そう急かすんじゃないロキ。とはいえ主役がいつまでも登場しないのも問題だからな。ほらロキのところへいつてこい二人共。」

そう言われてロキのほうへと歩いていくとフィンが声を上げる。

「はい、みんな注目！みんな知らないと思うけど今日の入団試験で2人の新人が入団することになった。二人共まだ子供だけど実力は僕のお墨付きだよ。」

それをきいた途端団員達が騒ぎ始める。それもそのはず。みたことのない子供がレベル6の冒険者であり自分達の団長から実力は充分だと言われているのだ。騒がないほうが無理と言うものだ。

そしてそんな騒ぎを収めるかのようにロキが声を上げる。

「ほら、みんな静かにしいや！今から自己紹介して貰うから！ほらボレアス、クシャたんこっちきて自己紹介や！」

「えー・・・と、ミラーボレアスです！年は10歳です！迷惑をおかけすると思いますがよろしく願います！」

「ミラークシャです！年は8歳です！よろしく願います！」

「つてことでボレアスとクシャたんや！みんな仲良くしたつてや！。そして！今日は歓迎会や！みんな騒げええええ！」

その一言と共に騒がしい夜が幕を明けた。



## 恩恵とステータス

騒がしかった歓迎会も終り、いよいよロキから恩恵を授かる事になったボレアスとクシヤだったが肝心のロキが……

「うう……気持ち悪い……リヴェリア肩かしてえや……」

「飲みすぎだ馬鹿者。はあ……ボレアスとクシヤへ恩恵を刻むのは明日にするか?」

「いや、ええよ……今日やろか。ウチも二人のステータスがきになるしな……ウツプ」  
「吐くんじやないぞロキ?!」

そんなロキとリヴェリアを見ながら2人の後ろについてロキの私室へと歩くボレアスとクシヤ。

そして何度かマライオンになりかけていたロキとそれを介抱するリヴェリアという図を目撃しながらも10分程歩いてロキの私室へと到着する。

「うう……大分楽になったで……それじゃあ、二人共上着脱いでベットにうつ伏せになってくれや。」

言われた通り上着を脱ぐボレアスと風呂場での事件からか少しロキを警戒しながらも上着を脱ぐクシヤ。

そんな様子を見たロキは、

「そんな警戒せんでもええやんかクシヤたん……。ま、ええか……。それでどつちからやるんや?」

その言葉でどちらも先にやりたかった為、言い争いになりかけたがリヴェリアの一言でジャンケンでどちらが先にやるかを決めることになり、勝ったクシヤから先に恩恵を刻まれることになった。ちなみにリヴェリアは副団長の仕事があるらしく出て行ってしまった。

「じゃあクシヤたんからやなー。じゃあベットにうつ伏せになってくれや〜。」

その言葉に若干緊張しながら頷きベットにうつ伏せになるクシヤ。

「そんな緊張せんでもええでクシヤたん。しっかし綺麗な背中やなあ……。んじゃ、やってく〜。」

といいながら自身の指に針を突き刺し、溢れてきた【神血】《イコル》をクシヤの背に押し付け、線を引いていくロキ。そうするとクシヤの背中が光り、光が収まると同時にクシヤの背中には笑う道化の刺青のような物が浮かんだ。

「おし、これで【恩恵】《ファルナ》は刻まれたでー。ステータスは今から更新するからちとまってなあ。……ってなんやこれ?!」

「私のステータス何かおかしかったですか?」

「いや・おかしくはないんやけどな。魔法が発現するとは思ってたけどまさかいきなり二つもそれにこのスキル。まあえつか。うし、これがクシヤたんのステータスや。」

と言われ渡された紙を見るクシヤ。内容は

名前：『ミラ・クシヤ』

所属：『ロキ・ファミリア』

種族：『龍人族』

レベル：『1』

力：10 ↓ H125

耐久：10 ↓ I50

魔力：10 ↓ H150

敏捷：10 ↓ H190

器用：10 ↓ H185

『スキル』

【風翔龍の加護】

・早熟する。

- ・竜種と相対した場合、全ステータスが大幅に上昇。瀕死になるとさらに上昇。
- ・試練が訪れやすくなる。

## 『魔法』

・【ステラ】 詠唱文 「我が身に流れる風翔龍の血よ目覚めよ」

追加詠唱により威力上昇。レベルアップにより追加詠唱文獲得。

・風の矢を放つ。着弾地点に嵐の如き暴風を巻き起こし、敵を風の刃が切り刻む。威力は魔力依存

・【フェザー・シールド】 詠唱文 「風よ。わが身を守れ。」

追加詠唱により効果上昇。レベルアップにより追加詠唱文獲得。

・風の鎧を纏う。

「これが私のステータス・・・。」

「せや、これがクシヤたんのステータスや。あ、言い忘れとつたけどステータスは誰にも見せちゃあかんで。ステータスは自身の人生そのものや。例え同じファミリアの家族にも気安く見せちゃあかんで。」

「わかりました。」

「うし、なら次はボレアスやな。さっきのクシャたんみたいのうち伏せになってくれや。」

そういわれて今度はボレアスがベツトにうつ伏せになる。

そして先ほどのクシャと同じ流れで【恩恵】《ファルナ》を刻まれステータスを更新されるボレアス。

「はあああ?!クシャたんでも驚きだったのにいきなり魔法が3つやて?!」

と驚きながらもボレアスのステータスを紙に書き出していくロキ。

「これがボレアスのステータスや。」

そういわれ紙に目を落とすボレアス。

名前：『ミラ・ボレアス』

所属：【ロキ・ファミリア】

種族：『龍人族』

レベル：『1』

力：I0 ↓ H195

耐久：I0 ↓ H130

魔力	: I 0	↓	H 1 7 0
敏捷	: I 0	↓	H 1 9 3
器用	: I 0	↓	H 1 5 0

## 『スキル』

## 【祖龍の加護】

- ・早熟する。
- ・竜種と相対した場合、全ステータスが大幅に上昇。瀕死になるとさらに上昇。
- ・試練が訪れやすくなる。
- ・竜種を調教しやすくなる。

## 『魔法』

・【ルーツ・ブリッツ】 詠唱文 「我が身に流れる祖龍の血よ。敵を焦がし尽くせ。」  
追加詠唱により威力上昇。レベルアップにより追加詠唱文獲得。

- ・超高温の雷を発現させる。また、任意で自身の狙ったところへ雷を落とす。

・【バルカン・フレイム】 詠唱文 「我が身に流れる紅龍の血よ。敵を燃やし尽くせ。」

追加詠唱により効果上昇。レベルアップにより追加詠唱文獲得。

・自身を中心に超高温の炎を発生させる。発生された炎は自身により操作可能。

・[ミラ・エンチャント]

・自身、及び武器に雷又は炎の属性を付与する。

詠唱文 炎属性の場合【燃やせ】

雷属性の場合【焦がせ】

「これが僕の・・・」

「二人共なんちゅーチートステータスなんや。。。まあ、今夜はとりあえず、ゆっくり休めや二人共。明日また詳しいことは説明する。とりあえず、空いてる部屋に二人が持つてた荷物とかは置いてあるからその部屋まで案内するわ。」

そういわれロキへと連れられて空き部屋へと連れられた2人。なんでも1部屋しか今は空きがないので、1部屋にベットを2つ置いて二人の私室ということにするらしい。

そして2人を案内したロキは「おやすみやでー」と言い、そそくさと出て行ってしまった。その後すぐ2人とも疲れていたのか自然と瞼が下がっていき、3分もしないうちに寝てしまった。

「これがボレアスとクシヤのステータスや。みんな、どう思う？」

とロキの声が团长室に響く。いまこの部屋にいるのはフィン。リヴェリア、ガレス、ロキの3人と1柱。

「これは……すごいね。」

「ああ……。クシヤは2つ、ボレアスに至っては3つも魔法を……。しかし、それよりもこのスキルは……」

「ああウチもそこが気になってな。……これは確実にレアスキルや。他の神に見つかったら確実に面倒な事になる。それに……」

「ああ……試練が訪れやすくなる、か……。そうだね、2人に力がつくまではダンジョンに潜る際は僕らのうちの誰か1人が着いていくようにしよう。」

それを聞いたリヴェリアとガレスは頷く。

「ふう……。しかし、これは未恐ろしいね……」

最後にそう呟くフィンにみなが同意し、解散となった。



## 初めてのダンジョン①

ロキにより恩恵を授かった翌日、二人はリヴェリアによって起こされていた。時刻は朝7時

「おはようボレアス、クシヤ。よく眠れたか？」

その問いに二人共、「おはようございます」とあいさつした後「よく眠れました。」と答えた。

それを聞いたリヴェリアは微笑みながら

「なら良かった。では、朝食を食べに行こう。」

そういわれてリヴェリアについて部屋を出て食堂へと向う3人。

食堂では既に多くの団員が食事をしていおり、かなり賑やかだった。なんでも、夕食と昼食は「黄昏の館」にいる団員同時にとるらしいが朝食はダンジョンに潜る団員や予定がある団員などは速めにとることがあるため同時にとることは少ないらしい。

そんなことを聞きながら朝飯を受け取って、席に着く3人。

そして3人で手を合わせてから食事を始めるとリヴェリアが口を開いた。

「今日から1週間2人は午前中は私のダンジョン講座を受けてもらい、午後からは実際

に私かガレスと共にダンジョンに潜ってもらおう。本来は、ダンジョンに潜る前に修行してもらうのだが2人には不要だとフィンが判断したのでな。」

「さっそくダンジョンですか……。少し緊張しますね。」

「えー。私は楽しみだけだなあ。お兄ちゃんって結構心配性だよな。」

「心配性なくらいがちようどいい。ダンジョンでは何が起こるかわからないからな。この1週間は3層までしか潜らない予定だからそこまで危険はないと思うが用心するに越したことはない。」

そういつて二人にダンジョンの危険性を説くリヴェリア。実際に、ダンジョンで命を落としてる団員はこの「ロキ・ファミリア」でも少なくない。そして命を落とした団員の中には慣れからくる慢心により命を失った団員も多い。だからこそ、ボレアスの用に心配性な性格の方がダンジョンから生きて帰ってくる可能性は高いのだ。

そして、リヴェリアからダンジョンの危険性を20分ほど聞かされながら食事を終えた3人は今度はリヴェリアの私室へと案内された。

「お邪魔します。」

そしてリヴェリアの部屋へと足を踏み入れた2人の目に入ったのは本棚に丁寧に並べられた本の数々。本棚の数も1つだけでなく4つほどあり、部屋の半分は本棚が占領しており、どの本棚にもびっしりと本が並んでいた。

そして、ベットの横に置いてある円卓型の机。そこに椅子が3つ置いてあり恐らくここでダンジョン講座を行うのだろう。その証拠になにやらダンジョン資料と書かれた本が2冊おいてある。

そうして部屋を観察していた2人にリヴェリアが声を掛ける。

「2人共、ここに座るといい。それとボレアス。多くの本が有るのが珍しいのは分かるが男性が女性の部屋を観察するのはあまりよろしくないぞ。」

「すいません……。でも、この本全部リヴェリアさんの本ですか?」

「ああそうだ。といっても多くは魔法に関する物だがな。興味があるのか?」

「・興味が無いと言えば嘘になります。ただ、僕は魔法がもう3つ発現してるので……」  
「あ、私も興味があります。リヴェリアさん良かったら私に何冊か貸してくれませんか? 幸い私は2つしか魔法がないので!」

「そうだな……。では、簡単な物を何冊か貸そう。2人で読むといい。だが、その前にまずはこちらの本を覚えてもらう。」

そういつて机の上に置いてあつた2冊の本をそれぞれボレアスとクシヤに渡すりヴェリア。

「その本は『ロキ・ファミリア』の団員達が今まで集めたダンジョンに関する情報を纏めた本だ。各階層で出現する怪物《モンスター》やダンジョンギミック、後は地形等につ

いて纏めてある。とりあえず今日は1〜10層までの項目を覚えてもらう。昼前に確認テストを行うから真面目に取り組むようにな。」

「分かりました。」

「じゃあ、頑張ってくれ。私は自分の仕事があるからテストの時にまた戻ってくる。」

そう言つて部屋から出て行つたリヴェリア。

リヴェリアが出て行つた後、黙々と1〜10階層までの情報を頭に叩き込んでいくボレアスとクシヤ。出てくるモンスターの種類、特徴、弱点。また、地図も同時に頭に叩き込む。ハントの教えにより地形の把握の大切さは理解している2人。

そして2時間ほどで1〜10層までの情報は頭に叩きこみ終わったので11階層から下の層についてもフライングで勉強していく2人。

そうして15階層まで勉強を終えたところでリヴェリアが戻ってきた。

「どうだ？ 順調か？」

「はい。僕もクシヤももう10階層までの情報は完璧に覚えました。」

と笑顔で答えるボレアスと得意気な顔をするクシヤ。

「そうか。勉強を嫌がる団員も多いのに2人は真面目だな。」

「ダンジョンでの情報の大切さはハントから聞いてましたから。それに僕もクシヤも勉強は嫌いじゃないので。」

「うん。私も勉強は好きだなあ。知らない事を知るのってなんかわくわくするし！」

「そうか。それはいいことだ。だがダンジョンでは好奇心を抑えることも大切だぞ？」

と昔の自分を思い出し、笑みを浮かべながらも注意をすることを忘れないリヴェリアア。

そして、二人の前に紙を置く

「それでは、朝いつていた通り確認テストを行う。2人の様子を見る限り問題なさそうだが、一応不合格だったら追試をするからな。」

「わかりました。」

「よし、では始めてくれ。」

そうリヴェリアアに言われてテストを解いていく2人。問題を確認する時間以外にペンを止めることはなく、スラスラと問題を解いていき、20分ほどで2人共全問題を解き終わり、ペンを置いた。

「終わったようだな。では採点を始めるぞ。」

そういつて二人のテストに目を通していくリヴェリアア。

10分程2人のテストに目を通したりヴェリアアが顔を上げて

「すごいな2人共満点だ。これなら明日からも大丈夫そうだな。」

そういわれて安心するボレアスとクシャ。

「では、昼食にいくとしよう。昼からは私と共にお待ちかねのダンジョンに行くからな。」

そういわれて食堂へと歩みを進める3人。

## 初めてのダンジョン②

「よし、クシヤも準備は大丈夫？」

「うん、急いでリヴェリアさんのとこにいかないよー」

その後、昼食を食べ終わった2人は武器はハントから貰った物があつたのだが、防具がないということで「ロキ・ファミリア」の倉庫にある物の中で自分達の体格にあつたものを探し、ボレアスは動きやすさを重視し、軽めの皮で出来た鎧を。クシヤも弓メインで戦うので見た目重視で防具というよりは服のような装備を選んでいた。ちなみに尻尾が隠れるように2人ともズボンは少し大きめの物を着ている。

そしてその後自分達で少し調整を施し、門で先に待っていたリヴェリアの元へと向つた。

そして、リヴェリアと合流を果たし、3人でギルドへと向う。

ダンジョンに潜るには先にギルドで冒険者登録を行い、所属ファミリアや自身の名前を書いた後、簡単なダンジョンについての講習を受けるらしいのだが、2人についてはなんでもフィンが先に話を通してあるらしく受けなくて良いらしい。

そして、それらが終わった後、正式に冒険者登録が終わった証として、金属のタグのよう

な物を渡されるらしい。

そんな説明を受けながら歩いていた3人だったが、目的地のギルドに到着したのでリヴェリアに連れられ、受付カウンターに向う。

そしてそんな3人を見て周りの冒険者達や、ギルド職員までもざわつく。

「おいおい、あれ九魔姫《ナイン・ヘル》じゃねえか?! 後ろに連れてるのは新人か?」

「いや、今年「ロキ・ファミア」の入団試験は合格者0だつて噂だぞ?」

「じゃあ、あの後ろのガキ達はなんなんだ?」

「俺が知るかよ。」

などとそこから中から聞こえてくるがリヴェリアは特に動じず受付カウンターに向うと目的の人物を呼んでもらう。

「アイシヤはいるか?」

「アイシヤですか? 少し待ってくださいね。アイシヤ。リヴェリアさんが呼んでるよー!」

とギルド職員が声を上げるとどこからか「はい!」という返事が返ってきた。

そしてすぐにアイシヤと呼ばれた女性が後ろの扉から現われた。綺麗な黒髪が特徴的な美しい女性だ。

「お待たせしてすみません! 何の用ですか?」



「ああ。この2人の冒険者登録をお願いしたい。フィンから話は聞いてるな？」

「ああー！この子達が！わっかりました！それじゃ用紙を取ってくるので少し待っていてくださいねー！」

そういつて走って用紙を取りに行くアイシャ。見た目とは違って話し方といい行動といい活発な女性なようだ。

そして2分ほどするとアイシャが戻ってきた。

「お待たせしました!!では、こちらの用紙に名前と年齢、それと所属ファミリアを書いてください!!」

そういわれたので書いていくボレアスとクシヤ。だが種族の欄になぜか既に人間とかがかれており、困惑するボレアスとクシヤ。

「あのアイシャさん・・種族の欄なんですが・・」

「ああ！それについてはそのまま出してもらって結構です！」  
「わ、わかりました。」

そういわれて全ての欄を埋めたボレアスとクシヤ。

そしてその紙を受け取ったアイシャ。

「よし！あとはこれでタグを渡せば終わりですので少しお待ちください！」  
そういつてまた後ろの部屋へと走っていくアイシャ。

その間にリヴェリアが2人に先ほどの種族の欄についての説明をする。

「ギルド職員も全員が全員信用できるわけではないのでな。アイシャは少し喧しいが信用できる人物なのでな。フィンが前もって話をつけていたわけだ。2人の名前が有名になれば隠し通すことも難しいだろうが、その時はロキがなんとかするさ。」

「なるほど……。しかし、アイシャさんはいいんですかね？ あれって一応大事な書類ですよね……？」

「たしかに。お兄ちゃんの言うとおりにアイシャさんは知ってて見逃したわけですよ……？」

「大丈夫だろう。それにアイシャはああみえて結構強かだな。のらりくらりとやり過ぎ。」

リヴェリアがそういうのならそうなのだろうと納得する2人。

そうしているとアイシャが戻ってきた。

「はい！こっちがボレアス君でこっちがクシヤちゃんのね！あ、それと2人の担当アドバイザーは私になるからなにかあったら私に相談してね！」

「はい。ありがとうございますアイシャさん。それと、よろしくお願いします。」

「ありがとう！それとよろしくねアイシャさん。！」

そしてタグを装備にくくりつける2人。ボレアスは腰の双剣のホルダーにくくりつ

け、クシヤは背中に背負っている矢筒にくくりつけたようだ。

そして2人がタグをつけ終わったの見たリヴェリアが、

「終わったようだ。ではダンジョンに行くとしようか。」

と言い歩き出す。そしてそれに着いて回るボレアスとクシヤ。

「ここが【始まりの道】つまり、ダンジョンの入り口だ。」

「・・・緊張するなあ。」

「やつとダンジョンだー!」

2人の両極端な反応を見て苦笑しながら歩を進めるリヴェリア。そしてそれに続くボレアスとクシヤ。

「まあ、今日は1層の目立たない所で2人の魔法を確認するだけだ。そう危険なことはないさ。」

「魔法の確認ですか?」

「ああ。どれくらいの威力なのか気になるし、団員の實力も把握しておかないといけな  
いからな。」

「そうなんです。分かりました。」

「わかりましたー!」

そして、遂にダンジョン1階層へと到着した。

## 初めてのダンジョン③

第一階層へ到着した3人。

今日はこの階層でモンスターを倒している冒険者は少ないようで、そこらを見渡せばそれなりにモンスターがいるのが見える。

まず3人が最初に出会ったモンスターは緑色の小人のような容姿のモンスター、ゴブリンだった。どうやら4匹の集団で行動しているようで冒険者を探しているのかキョロキョロと周りを見渡している。

それをゴブリンの視界の外から見つけたクシヤがリヴェリアに確認をとる。

「リヴェリアさん。撃つていいですか？」

「ああ、やってみるといい。」

「わかりました。お兄ちゃん、私が2匹殺るから、残りは頼んだよ。」

「わかったよ。クシヤ。じゃあそつちのタイミングに合わせるから。」

「おっけーい。じゃ、いくよー。」

そういつて矢を構え、放つクシヤ。そして同時に走り出すボレアス。クシヤが放った矢がゴブリンの集団の内の1匹の頭に命中し、矢が当たったゴブリンが瞬く間に霧に変

わった。

そして仲間が殺されたことで3人に気づいたゴ布林達。だが、既にクシヤは2射目を構えており、1射目の時点で走り出していたボレアスは自身の双剣の間合いにゴ布林2匹を捕らえていた。

そしてクシヤが2射目を放つ前に、自身の前に居たゴ布林の首を引裂くと瞬く間に1匹のゴ布林が霧になって消え、それに少し遅れてクシヤの2射目が放たれ3匹目のゴ布林の頭に矢が刺さり霧と化す。

そして残った1匹も危なげなく、胴体を袈裟斬りにすることで倒すことに成功したボレアス。

「ふー……。うん。中々良かったんじゃないかな。」

「そうだねえ……。あ・お兄ちゃんちゃんと魔石回収しないと！ハントに教えてもらったじゃん！」

「おっと、忘れてた。」

「そうだと2人共。倒すだけじゃなく魔石の回収までが冒険者の基本だからな。」

そういつて転がっていた魔石を回収していくボレアスとクシヤ。

そして何度かゴ布林の他に狼と人を足して2で割ったようなコボルドというモンスターも危なげなく撃破していき、そこそこの魔石を稼いだボレアスとクシヤ。

リヴェリアは付き添いで来ていただけなので戦闘には参加していない。

そして何十匹目かのモンスターを狩ったところで、本来の目的である2人の魔法の確認を行うことにしたリヴェリア。

「よし、2人ともそろそろ魔法の確認を行うとしよう。」

「わかりました。ただ、周りにもうモンスターがいないようなのですが・・・」

「そうだねー。お兄ちゃんが暴れすぎるせいじゃない？」

「クシヤにだけは言われたくないけどね・・・。少しモンスターが出てくるまで待ちますか？」

「そうするとしよう。2人とも疲れているようには見えないが、休憩だ。」

「わかりました。」

「わかりましたー。・・・お腹すいたなあ。」

などといって座って休憩をとる3人。そして10分程談笑しているとダンジョンの壁からゴブリンが3体わがみ生み出された。

そしてそれをみていたリヴェリア。

「お待ちかねのモンスターだぞ。クシヤから先に魔法を見せてくれ。」

「わかりました。どっちから行きますか？」

「今回は【ステラ】だけでいいぞ。【フェザー・シールド】は最悪、ダンジョンじゃなく

でも確認できるからな。」

「わっかかりましたー!」

そういつて3体のゴブリンに向つて詠唱を始めるクシヤ。

「我が身に流れる風翔龍の血よ。目覚めよ。」

クシヤを中心に魔力が渦巻く。そしてその魔力の渦に気づいたゴブリン達がクシヤに向つて走り出すが、遅かつた。

既にクシヤの周りには台風かと思うような強風が吹き荒れ、近くに居たりヴェリアはともかくボレアスは強風に飛ばされないよう足に力を込めていた。

そして、風の中心にいたクシヤの頭上には風で形作られている矢が出来ていた。

そして遂にクシヤが魔法を放つ。

「【ステラ】」

クシヤがそう言い放つた瞬間クシヤを中心に吹き荒れていた強風がクシヤの頭上にある矢に集まると同時に矢がゴブリン達の足元に向つて放たれた。

風の刃がゴブリン達の足元に刺さつた瞬間、それまで矢を覆っていた強風が一気に解放され、風の刃となりゴブリン達を切り刻んでいく。そして3秒ほど風の刃に蹂躪されていたゴブリン達だったがやがて、霧へと変わる。

そして、そんな様子を見ていたリヴェリアは心の中で

(レベル1の冒険者の魔法の威力はないな……。全く、コレほど強力な魔法を使うとは恐ろしいなミラの一族。)

と驚き半分、感嘆半分で呟いた。

そして魔法を放った当の本人は

「ふー……。私の魔法どうだった？かっこよかった?！」

「うん、かっこよかったよクシャ。でも、魔石まで消滅させちゃだめだよ。」

「え?!あ……。ほんとだ。魔石なくなってる!なんで?！」

「攻撃の威力が強すぎると魔石が消滅することは多々ある。次からは少し加減することだ。それと大丈夫か?！」

「へ?なにがです?！」

「いや、初めて魔法を使った冒険者は精神《マインド》を消費することになれてなくて疲労感を感じる人が多いのだが……」

「いや、特に疲労感とかはないですけど……」

「そうか。ならば良いのだが。」

そしてそうこうしてる間に今度はコボルドが5匹生み出された。

「よし、では次はボレアス。いってこい。」

「わかりました。えーつとどれから使えば……」



「好きに使っていいが・・・クシャと同じで【ミラ・エンチャント】は最悪ダンジョンでなくても確認出来るからな。だから今回は残りの2つを使ってくれ。」

「わかりました。じゃあまずは・・・」

そういいながらコボルドに向って詠唱を始めるボレアス。

「我が身に流れる祖龍の血よ。敵を焦がし尽くせ。」

詠唱を終えた途端、ボレアスの周囲に雷が発現し、バチバチと音を立てて発光している。そして、それにコボルドたちが気づくより先にボレアスが魔法を使用する。

「【ルーツ・ブリッツ】」

ボレアスがそう言った途端、コボルド達の中心に1つの雷で出来た球が出現したと思っただ途端、その球からコボルド達へ向って無数の落雷が轟音を響かせながら起こる。

そして、一瞬でコボルド達は霧に変わる。そして当然の如く魔石も消滅していた。

「ふー・・・。少し、地味だね。」

「えー、そんなこと無いよお兄ちゃん！ただ、少しうるさいね。お兄ちゃんの魔法。それに魔石も消えちゃった。」

「そうだね。この魔法はピンチの時以外は封印だね。リヴェリアさん僕の魔法どうでした？」

「あ、ああ。クシャと同じく強力な魔法だな。それとボレアスも疲労感などは特にない

か？」

「？はい。特に疲労感とかはないですね。いつも通りです。」

「そ、そうか。ではもう1つの魔法も使ってみるといい。さっきの音で周りのモンスターが少し集まってきたぞ。」

「そうですね。．．．そろそろ僕もお腹が減ったので終らせますか。」

「素晴らしいながら集まってきたコボルド3匹と2匹のゴブリンに向って詠唱を始めるボレアス。」

「我が身に流れる紅龍よ。敵を燃やし尽くせ。」

ボレアスを中心に真つ赤な炎が発生し、ボレアスの周囲の温度が一気に上がる。

そしてそれらの炎がボレアスを守るかのようにボレアスの回りを漂い始める。

そしてボレアスが魔法を発動させる。

「【バルカン・フレイム】」

そうボレアスが眩き、手をモンスター達に向けるとボレアスの周りを漂っていた炎が一斉にモンスター達を包み、一瞬で霧に変える。

ちなみにまたもや魔石は消滅した。

「よし、終わりました。」

「そ、そうだな．．．。そろそろかなり時間も経っているし帰るとしよう。」

「そうですねー。私もうお腹ペコペコです。」

そしてダンジョン入り口へと背を向ける3人。

その中でリヴェリアは内心驚きと若干の恐怖心を覚えていた。

（この2人の力は強力すぎる・・・帰ったらフィン達に相談だな・・・。明らかにレベル1の冒険者の魔法の威力じゃない。）

口には決して出さないが内心では驚きを隠せない。たしかにボレアスとクシヤがこのまま「ロキ・ファミア」で成長してくれば頼もしいことこの上ないが、もし、万が一、【闇派閥】に落ちてしまったら・・・

そんな事を考えてしまいそうになって慌てて首を振り、覚悟を決めるリヴェリア。

（この2人がそんなことになるはずがない・・・。あの時、ロキに夢を語った2人の目は本気だった。ならば私達がその手助けをしてやらなくてどうする。）

そしてそんなリヴェリアを見て首を傾げるボレアスとクシヤ。

そしてそんな2人に微笑みながら

「いや、なんでもないさ。では帰るとしようか私達の家に。」

そういつてダンジョンを出る3人。

## 初めてのダンジョン 終

初めてのダンジョン探索を終えたボレアスとクシャの2人はリヴェリアに連れられて集めた魔石の換金に着ていた。

「2人で50000ヴァリスか。半日で1層目だけでこれだけ稼げれば上出来だろう。」

「そうなんですか？それなら良かったです。」

「そうだね。他のレベル1の冒険者はどれくらい稼ぐんだろ？」

「そうだな……。大体1日で50000ヴァリスくらいだな。」

等と話しながら換金を終えた3人は「黄昏の館」へと歩みを進める。

そして、3人が「黄昏の館」へ帰ると丁度夕食の時間であり、3人も急いで食堂へと向う。そしてギリギリ間に合った3人。

そして、ボレアスとクシャが夕食を食べているとロキが隣の席にやってきた。

「ボレアスにクシャたん初めてのダンジョンはどやった？」

「少し緊張しましたけど、初めてにしては上手くいったと思います。」

「私は楽しかったですねー。速く2層目、3層目にもいきたいです！」

「そかそか。まあ2人ならすぐにいけるようになると思うでー。」

「そういつてもらえると安心できます。」

「せやせや。ボレアスはもう少し自分に自信を持ちーや。」

「そうだよ。今日だってボレアスの一杯モンスタ倒してたじゃん！」

「そう言われても・・・」

「まあ、ダンジョンに潜り続ければそのうち自信もつくから焦らんでもええけどな。」

あ、それと2人とも夕飯食べ終わって風呂入ったらステータスの更新するからうちの部屋きてな。」

「わかりました。」

「うし、じゃあウチはちよつと部屋戻るから2人はゆっくり食べてな。」

そういつてロキが食堂から出て行く。そしてロキが出て行つてから15分程経つて夕飯を食べ終えた2人。

2人は一旦部屋へ戻りタオル等の洗面用具を持って風呂場へと向う。

そして、シャワーで汚れをとり、髪を洗い、体を洗い、そして疲れをとるためゆつくりと風呂に浸かる。

そして20分ほど風呂に浸かった後、2人共パジャマに着替えて一旦部屋へ洗面用具を置きに戻り、ロキの部屋へと向う。

「ロキ様、ボレアスです。クシャも一緒に居ます。」

「おー入ってええでー。」

「失礼します。」

そういつて入っていくボレアスとクシャ。

「早速、ステータスの更新するでー。前みたいに上着脱いでうつ伏せでベットに寝転がってやー。」

そう言われてロキのベットへと寝転がるクシャ。今回もクシャから先にステータスの更新をするらしい。

「それじゃやってくでー。うーん相変わらず綺麗な背中やなあ。」

「ロキ様・・・少しくすぐつたいです・・・」

「我慢してやクシャたん。・・・うつし更新は終わりやでー今紙に写すからなー。」

そういつてクシャにステータスを写した紙を渡したロキ。

「うし、次はボレアスの番やでー。」

そういわれたのでクシャと入れ替わりでベットにうつ伏せで寝転がるボレアス。

そしてロキによるステータスの更新を行ってもらい、自身のステータスを写した紙をロキから貰う。

「これでステータスの更新は終わりやでー。さ、2人とも明日も朝早いんやろ？部屋帰って休んどぎ。」

そういわれたので部屋から出て自分達の部屋へと戻るボレアスとクシャ。  
そして2人が出て行った部屋でロキが呟く。

「・・・2人には言わんかったけどなんやあのステータスの上がり方。ほんまにチートやであれ。」

そして2人にステータスの更新を行ってから3時間程たつて夜中といえる時間に会議室に集まったロキとファミリアの幹部達。

「それでリヴェリア。ダンジョンでのあの2人はどうだった？」

「・・・武器の使い方も魔法もレベル1の冒険者のそれではなかったな。特に魔法に関しては、な。」

「ほう。おまえさんがそこまでいうなら相当じゃな。」

「ボレアスもクシャたんもステータスの上がり方が半端じゃなかったで。恐らくスキルの効果やと思うんやけど・・・」

「恐らく、そうだろうね。それとリヴェリア。何か含みのある言い方をしていただけど2人の魔法に着いてなにかあったのかい？」

「その件についてなんだが……あの2人の魔法はたしかに強力だ。というより、強力すぎる。」

「というところ？」

「2人共、魔法で魔石を消滅させていた。それもそれほどの魔法を使っても2人共普段の様子と一向に変わってはいなかった。」

「それは……精神《マインド》を使用した疲労がなかったということかな？」

「ああ。あの様子では恐らく魔法を連続使用できるだろう。」

「それは頼もしいね……。ただ、今は閨派閥《イヴィルス》のこともある。3人でしっかりとフォローしていこう。」

「そうじゃな。儂も老体にムチを打つとしよう。」

「そうだな。」

「せやなー。ボレアスもクシャたんもウチの大切な家族や。閨派閥《イヴィルス》の連中に手は出させへん。」

それに全員が頷いて会議は終わった。



## 闇派閥と正義のファミリア

ボレアスとクシヤは自室へと戻り、2人で更新したステータスを確認していた。  
名前：『ミラ・クシヤ』

所属：〔ロキ・ファミリア〕

種族：『龍人族』

レベル：『1』

力：H125 ↓ H145

耐久：I50 ↓ I60

魔力：H 1 5 0  
↓  
G 2 2 0

敏捷：H 1 9 0  
↓  
G 2 4 0

器用：H 1 8 5  
↓  
G 2 4 5

『スキル』

【風翔龍の加護】

・早熟する。

・竜種と相対した場合、全ステータスが大幅に上昇。瀕死になるとさらに上昇。

- ・ 試練が訪れやすくなる。

### 『魔法』

- ・ 【ステラ】 詠唱文 「我が身に流れる風翔龍の血よ目覚めよ」  
追加詠唱により威力上昇。レベルアップにより追加詠唱文獲得。
- ・ 風の矢を放つ。着弾地点に風の如き暴風を巻き起こし、敵を風の刃が切り刻む。威力は魔力依存

- ・ 【フェザー・シールド】 詠唱文 「風よ。わが身を守れ。」  
追加詠唱により効果上昇。レベルアップにより追加詠唱文獲得。
- ・ 風の鎧を纏う。

「うーん伸びてるのは分かるんだけど、これって他の人と比べてどうなのかな？」

「うーん・・・僕もおんなじくらいだし、普通なんじゃない？」

「えー。お兄ちゃんのスータータスも見せてよ。」

「はい。これが僕のスータータス。」

名前：『ミラ・ボレアス』

所属：【ロキ・ファミリア】

種族：『龍人族』

レベル：『1』

力：H 1 9 5      ↓      G 2 2 5

耐久：H 1 3 0      ↓      H 1 5 0

魔力：H 1 7 0  
↓  
G 2 4 0

敏捷：H 1 9 3  
↓  
G 2 5 5

器用：H 1 5 0  
↓  
G 2 0 0

『スキル』

【祖龍の加護】

- ・早熟する。
- ・竜種と相対した場合、全ステータスが大幅に上昇。瀕死になるとさらに上昇。

・ 試練が訪れやすくなる。

・ 竜種を調教しやすくなる。

『魔法』

・ 「ルーツ・ブリッツ」 詠唱文 「我が身に流れる祖龍の血よ。敵を焦がし尽くせ。」  
追加詠唱により威力上昇。レベルアップにより追加詠唱文獲得。

・ 超高温の雷を発現させる。また、任意で自身の狙ったところへ雷を落とす。

・ 「バルカン・フレイム」 詠唱文 「我が身に流れる紅龍の血よ。敵を燃やし尽くせ。」  
追加詠唱により効果上昇。レベルアップにより追加詠唱文獲得。

・ 自身を中心に超高温の炎を発生させる。発生された炎は自身により操作可能。

・【ミラ・エンチャント】

・自身、及び武器に雷又は炎の属性を付与する。

詠唱文 炎属性の場合【燃やせ】

雷属性の場合【焦がせ】

「本当だね。お兄ちゃんも私も同じくらいのステータスの伸びだね。」

「うん。多分大剣使ったら力も上がるだろうし、明日は大剣使おうかな。」

「そうだね。私も明日は弓だけじゃなくて別の武器借りて使ってみようかな。」

「うん。それもいいと思う。」

そして明日からのダンジョンについて2人で話してる間に夜も深まってきたので寝ることにした2人。

そして翌日も午前中はリヴェリアによるダンジョン講座を行い、午後はガレスと共にダンジョンへ潜り、前日確認していなかった魔法を確認していた。ちなみに今日はス

テータスアップしたこともあり、4層にきていた。

「燃やせ。【ミラ・エンチャント】」

そうボレアスが呟くとボレアスの体と持っていた大剣が炎に包まれる。

そしてボレアスはそのまま炎を纏い、目の前のゴブリンに向って大剣を振りかぶる。ゴブリンはなんとか避けるも大剣が纏っていた炎に触れてしまい、そのまま燃やし尽くされた。

そしてゴブリンを倒したボレアスは魔石をゴブリンから取り出しながらなにやら違和感があったような感じで頭を捻っている。

「どうしたんじやボレアス。」

「あ・ガレスさん。なんか少し武器を使うときに違和感があつて・・・」

「それは多分ステータス上昇にまだ体が慣れてないんじやろ。そのうち慣れる。」

「はあ。そうなんですね。」

「そうじゃ。それよりもうひとつの方も試してみろ。」

「分かりました。焦がせ。【ミラ・エンチャント】」

ボレアスが魔法を発動させるとボレアスの体を纏っていた炎が離散し、かわりに眩い雷がボレアスと大剣に纏われる。



そしてボレアスは周囲にモンスターがいないので少し大剣を素振りして体を慣らす。そして10回ほど素振りし終えたとき、待ちに待ったモンスターがダンジョンの壁から生み出された。人と同じくらいの大きさをしたヤモリのようなモンスター。リザードが3体壁から生まれてきた。

それを見たボレアスはリザードに向って走り出し瞬く間に1体を縦に真つ二つに切り裂くとそのままの勢いで大剣を横になぎ払い2体目のリザードを真つ二つにする。

そして最後の1体は2体がやられている間にダンジョンの天井へと移動していたため、暇していたクシャが弓矢で倒していた。

そして忘れずに魔石を回収する。

「ふむ……。なんとというより斬るといよりは超高温で溶断しているような切れ味だな。」

「そうですね……。あんまり使いすぎると武器がダメになりそうです。」

「そうだね。ハントから貰った武器だし大切に使わないとね。」

「うん。それにこれくらいなら魔法を使わなくても勝てそうだしね。」

「そうじゃな、といたいのが油断するでないぞ。しかし、クシャの魔法は確かめにくいのお。」

「そうですね。わざと攻撃を受けるのはリスクが高すぎますし……。」

「うーん……。じゃあ私が魔法使うからお兄ちゃんがそこらへんに転がってる石を私に投げよ。」

「いいけど……。クシヤの魔法だと石がクシヤに当たる前に風圧でどつか飛んでくとおもうけど。」

「まあいいから。いいから。」

そういつて魔法を使うクシヤ。

「風よ。我が身を守れ。【フェザー・シールド】」

魔法を発動した瞬間、クシヤを守るようにクシヤを中心に風が渦巻き、クシヤの全体を覆っている。

「よーし。お兄ちゃん。投げて良いよー」

そういわれて転がっていた石をクシヤ目掛けてそこそこ力を込めて投げたボレアス。

そしてクシヤが纏う風に石があたった瞬間、石が細切れに砕けた。

「え?」

「ほう。」

そう、つまりクシヤが纏うのはただの風ではなく風の刃だったのだ。風圧もさることながら風の刃の切れ味に間抜けな声を出したボレアスと感心したかのようなガレス。

そして当のクシヤは

「わー……便利な魔法だなあ。攻防一体？っていうのかな？」  
等と言っていた。

そして、それぞれ全ての魔法の確認を終えたのでガレスの目の届く範囲で好きなようにモンスターを狩っていた。

そして、そんな2人を見ている冒険者達が居ることにガレスは気づいていたが、放置していた。

もし、2人に手を出せば即座に叩き潰す準備は出来ているぞと目で威圧してやれば、2人を見ていた冒険者達はどこかに消えていた。

そして、あらかたこの階層のモンスターを魔法も駆使し、狩りつくしたボレアスとクシヤはほぼ同じタイミングでガレスの元へと戻ってきていた。

ちなみに2人共今回は最初こそ魔石を魔法で消滅させていたが、ある程度加減を覚えて後半はしつかりと魔石を回収していた。

「流石じゃな。リヴェリアが褒めるだけのことはある。」

「？リヴェリアさんがなにか褒めてくれてたんですか？」

「私も初耳！リヴェリアさんなんていつてたんですか？」

「いや、なに2人共才能に溢れる若者だと言っていただけだ。」

と適当に話を打ち切ったガレス。

そして先ほど感じた視線のこともあり、少し速いがダンジョン探索を切り上げることにした。

「2人共、先ほど嫌な視線を感じた。少し速いがダンジョンから出るぞ。何も無いとは思うが。」

「!?わ、わかりました。」

「視線なんて感じなかったけど・・・ガレスさんがそういうなら・・・」

そしてダンジョン入り口へと足を進めていく3人。

そして、途中なんか遭遇したモンスターを片手間で処理していきながらダンジョンから出て、ギルドへ到着し魔石を換金するボレアスとクシャ。

今日は昨日より時間こそ短かったが、昨日より下層に潜ったこともあり2人で8千ヴァリスほど稼いでいた。

そして、2人はそれを持ってギルドの外で待つガレスの元へ向う。

そしてガレスへ今日の儲けを報告すると

我が家

「今日はまだ時間も速いからな。一旦【黄昏の館】に帰ってその金で少し遊びに行くか。」  
ガレスがそういうので一旦荷物を置いて私服へと着替えて門で集合する3人。ちな

みにシャワーはバベルにある冒険者用のシャワールームで浴びている。

「さて・・ほんとはワシもついていきたいんだが・・ワシは少し用事が出来たから、2人で行ってくるといい。」

「わかりました。じゃあくシャどこにいきたい?」

「うーん・・。あ、ここから近いし服でも見に行かない?今私達って私服ほとんど持ってないし!」

「そうだね。そうしようか。」

「そうじゃな。ここから近いし、遅くなることもないからそれがいいじゃろ。しかし日暮れ前には帰ってくるんじやぞ。」

「わかりました。日暮れまでは・・あと2時間くらいか。じゃ、いこつかクシャ。」

「そうだね。じゃいつてきます。」

「おう、気をつけてな。」

そして2人が行くのを見送り2人が見えなくなった辺りでガレスに声を掛ける人物がいた。

「本当に大丈夫なのか?2人で行動なんてさせて。」

「そう心配するなりヴェリア。あそこならよっぽどのが無い限り大丈夫だ。〔アス

トレア・ファミリア」も多く見回ってるしな。」

「だが……。」

「なあーに。ワシも後ろから着いて行く。本当にあの2人だけで行動させるわけがなからう。」

「そうか……。それなら心配ないな。」

「ああ……じゃあワシも行ってくる。」

そういつて歩き出すガレス

## 闇派閥と正義のファミリア②

「うわー、この服かわいくない?!」

「うん、かわいいと思うよ。」

とある人間向けの服屋に入るなりクシヤは色々な服を手にとりボレアスに感想を聞いてくる。

それにボレアスは都度答えていたのだがさすがに2桁を越えたあたりから返答が雑になっていき、それに対しクシヤは少し不満そうに頬を膨らめる。

ちなみに店員はそんな2人対して温かい目を向けている。

「なんかさつきから返答が雑じゃない?」

「そんなことないよ。それよりどれにするか決まった?そろそろ僕も自分の選びたいだけど……」

「うーん……どれもかわいいから悩むんだよね……お金もそんなに一杯あるわけじゃないし……」

「慎重になるのもいいけど速く決めないとじゃが丸君食べれないよ?」

「そうなんだよね……みんなおいしいって言うからじゃが丸君も絶対食べたんだけど」

かわいい服も多くって……」

「はく……じゃあ決まったら呼んでね。僕も自分の服みてるから。」

「はくい。」

ちなみにじやが丸君については「ロキ・ファミリア」のほかの団員達が食べているのを見て味について気になったクシヤが訪ねてとてもおいしい上に色々味のヴァリエーションがあると聞いてこの服屋に入るまでに今回の自由時間の目的の一つになっていた。

ちなみに、ボレアスは特に服に着いて拘りはないものの白色の服がお気に入りである。ちなみにクシヤは結構服に拘るタイプである。昔から母親にかわいい服を強請っていたの覚えがある。

そして、ボレアスが自信が買う服(白色のフード着きの長袖パーカー)を持ってクシヤの元へといくとクシヤも遂に覚悟を決めたのか一番最初に持ってきた白色のワンピースを手を持ってボレアスに向かって歩いてきた。

「結局それにしたの?」

「うん。値段的にも丁度良かったし。お兄ちゃんはそのパーカーにするの?」

「うん。今のズボンとも合うでしょ?」

「うん。いいと思うよ。じゃ、お会計だね。」



そういつて会計を済ませるボレアス。ちなみに前回と今回のダンジョンで稼いだ一万3千ヴァリスはボレアスが纏めてもっているため会計はボレアスが行う。ちなみに2人の服の合計は8400ヴァリスであった。

ありがとうございますーと言われながら会計を済ましたため店からでるボレアスとクシャ。

「それじゃあ服も買ったし次はじゃが丸君だね。」

「そうだね！楽しみだな〜」

といてジャガ丸君の屋台に向つて歩いていく2人。

そして5分程あるいてじゃが丸君の屋台についた2人はメニューの豊富さに絶句していた。

プレーンは当然としてチョコやミントはてにはわさびや小豆クリーム味などという変わり者まである。そして今抜き出したのですらほんの一部だ。

そこで2人は始めてなのでここは冒險せずに無難にプレーンにすることに決めた。

「すいません、プレーンを2つお願いします。」

「はいプレーン2つねー。どうぞー」

「ありがとうございます。」

とじゃが丸君プレーン味2つ（2つで60ヴァリスという超リーズナブルな値段）を

店員から受け取り、クシヤへと一つ渡し屋台から離れて近くにあったベンチへと腰掛けることにした。

そしてそんなボレアスの横にちよこんと座ったクシヤ。

そして2人とも「いただきます。」と喋ってじゃが丸君に噛み付く。

「ん、ほくほくしておいしいな。ジャガイモの甘さを引き立てるみたいに塩がほどよくきいてる。」

「んー！おいしい！いろんな味食べたいな〜」

そして2人共じゃが丸君を食べ終わり、ごみをきちんとゴミ箱にすてたところでもうすぐ日暮れが近い事に気づいた。

「もうこんな時間だ。そろそろもどろつかクシヤ。」

「そうだね〜・今度は1日休み貰って遊びに行きたいね〜」

「そうだね。うん次は別の味のじゃが丸君を食べよう。」

そして【黄昏の館】へと歩を進めるボレアスとクシヤ。そして、そんな3人に近づくと人影が1つ。

「君達、今日ダンジョンの4階層でモンスターを狩っていた2人だろ？」

「え、ええそうですけどあなたは？」

2人に話しかけてきたのは優しそうな人好きな笑みを浮かべた人間の男。たしかに

纏っている雰囲気などは優男のそれだがボレアスは少しこの男に苦手意識を持っている。

「いや、僕もたまたま同じ階層でモンスターを狩っていてね。それで君達に興味が湧いたんだ。どう少しお茶でもしないかい？ああもちろんお金は僕が持つからさ。」

「そうなんですか……。でも僕達そろそろ帰らないと……」

「いいじゃん。いいじゃん。少しくらい遅れても怒られないよ。それに奢りなんだよ？」

「いや……でも……」

「まあまあ固いこと言わないで。それにお金のことなら心配しなくても大丈夫だから僕、こう見えてレベル2の冒険者なんだ。」

「そういうことじゃ……」

「もーお兄ちゃん！せっかく奢ってくれるんだからいかなないと失礼だよ！」

「うーん……クシャがそこまでいうなら……」

「よし決まりだね。じゃあ僕行きつけのお店があるからそこでいいかな？」

「はい！お兄ちゃんもいいよね。」

「う、うん。」

「じゃあ決まりだね。こつちだよ。着いてきて。ねえ」

そういつて男が歩いていったので着いて行く2人。

そしてメインストリートを外れた脇道を進んでいく男。そして、どんどん気が無くなっていく。ここでボレアスが異変に気づく。

「……こんなところにお店なんてあるんですか？」

「もう少しいったところにあるよ。」

「……嘘ですよ。それにさつきから僕達以外の足音が後ろから聞こえてくるんですが知り合いですか？」

「気のせいじゃないかな？」

「……クシヤも気づいてるでしょ？」

「うん。ごめん。お兄ちゃん。私のせいで……」

「……ってことです。それで謎の冒険者さん本当の目的を教えてくださいませんか？」

「はあ……。ガキの癖に勘が鋭いじゃねえか……。つってもそっちについても大体気づいてんだろクソガキ。」

この言葉を聞いた瞬間に臨戦態勢を取る2人。

そして謎の冒険者の言葉と共に後ろからついてきていた謎の足音の正体が明らかになる。

「おい、てめーらの尾行が下手なせいではれちまったじゃねーかクソが！」

それは恐らく冒険者であろう2人の男それに二人共ショートソードを持っている。

「す、すいません・・・」

「で、ですがここならこいつらを攫つても足はつかないですよね！」

「たしかに足はつかねえとおもうが・・・つち予定が狂つちまったじゃねえか」

「だ、大丈夫ですよ！しよせんこいつらはレベル1。たしかに俺らもレベル1ですけどアニキはレベル2じゃねえつすか！」

「ま・・・そうだな。つち予定変更だ。ここでこいつら攫つてくぞ。」

ボレアス side

ボレアスは冷静に今の状況を分析していた。

最初はたしかに動揺していたが仮にもレベル5の冒険者であるハントに師事していたボレアスである。切り替えは早かった。

（・・・武器が無い上に人数も向こうが上。それに3人の内2人は武器を持つてる。恐らくここまで僕達を連れてきたあいつも武器を持つてるだろう。それに・・・あいつはさっきの会話から考えるにレベル2の冒険者。それに加えこっちはダンジョンに潜つてまだ2日のレベル1冒険者が2人。恐らく、というより絶対敵のレベル1の冒険者2人も僕達より長くダンジョンに潜つてるんだらう。・・・どうする？）

ボレアスには正直この場面を無事乗り切る図が浮かばなかった。

それもそのはず。レベルが1違えば勝つのはかなり困難になり2つ違えば絶望的、3つ違えば不可能。それほどまでにレベルの差というのは圧倒的であり、さらに人数でも負けている上に武器も持つていない。さらに敵のレベル1冒険者2人にも恐らくステータスで負けていると考えていい。

絶望的。まさにそういう見える状況だ。

だがボレアスには諦めるといふ考えは無かった。

（今ここで諦める？ありえない。クシヤを見捨てて逃げる？ありえない。じゃあここで戦つて死ぬ？ありえない。じゃあどうする？・・・ここで全員、殺す。レベル差？しらない。父と母は恩恵を持たずとも《俺》とクシヤを命を賭けて逃がしてくれた。じゃあ恩恵を貰った《俺》がこいつらに勝てない？そんな事は有り得ない。認めない。ここで・・・こいつらを殺す。自分の中に流れる祖龍と紅龍の血に賭けて。）

そしてボレアスの瞳からハイライトが消えていく。

クシャ side

(やっちゃった……。それにこの状況結構やばいよね……。うーん最初に足音に気づいた時点でお兄ちゃんと一緒に逃げるべきだったかな……。ま、過ぎた事きにしても仕方ないかな。それに、お兄ちゃんもやる気みたいだし。)

そういうしながら横に立つボレアスを見るクシャ。

たしかに、状況は絶望的だ。敵はレベル2の冒険者1人とレベル1冒険者2人。対してこちらはまだダンジョンに2回しか潜ってない冒険者が2人さらに武器も無い。たしかにまともに戦えば死ぬかもしれない状況だ。だけどそれがどうした？ 自分達は既に死んでもおかしくない状況を両親に生かさせて貰い、いまここで冒険者として生きています。死んでもおかしくない状況？ 上等だ。父と母はそれに立ち向かった。じゃあ子供である私達が立ち向かわない理由があるか？ 答えは、否だ。じゃあどうする？ 立

ち向かう。敵を殺しても自分達が生き残る。お兄ちゃんも覚悟を決めたのだ。じゃあ私も立ち向かおう。敵を殺して見せよう。この身に流れる風翔龍の血に賭けて。そしてクシヤの目に覚悟が宿る。